[illegible] ㊎済

俳諧資料カード	
年代	安永三
編者（筆者）	（[illegible]）
書名	[illegible]
備考	下

（下垣内蔵）

呉市阿賀北五丁目
下垣内和人
電話〇八二三－七一－九八五四番
〒737
下垣内氏

續猿蓑

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉

春のからすの畠ほる声　沾圃

初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧

内はどさつく晩乃ふるまひ　里圃

きのふから日和かたまる月の色　沾

狗脊かれて肌寒うなる　蕉

渋柿もことしは風に吹れたり　里

孫が跡とる祖父乃借銭　莧

脇指に替てほしがる旅刀　蕉

煤をしまへばはや餅の段　沾

約束の小鳥一さけ売にきて　莧

十里ばかりの余所へ出かゝる　里

笹の葉に小路埋ておもしろき　沾

何ゝ彼と川たる門の書つけ　蕉

以川く分様と渋おさき蜩蟷を　里

声川と吹出し家れ道つれ　莧

前角よおもくし花の色ておひて　蕉

見ゝのふそろふ袖乃まくへ口　沾

去年ゝ斗つけり萎れの桃古支　莧

伊勢の下向にべつたりと逢　里

長持に小挙乃伴乃そつくりと　沾

くりかへし宮の晴るゝまゝ雲　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里
椒の角乃まくてぬ夷穴　莧
淡路しの牛に俵をこぼしや　甚
たられぬ縄さらくさ门法　沾
肉付に倚せ氣のうらそろふ　莧
籠乃葉乃名古さゆし　里
せられて其く落葉も枝もむくむくと　沾
住居ちらしる燈れ切れ　甚
鼎守られ手力坂乃春の風　里
まぬられ早ふこぼれうる　莧
引こく雲精ふ靜まるをとさうさ　甚
をかしく火入をかくれ　薫　沾

花もそゝや踏しぬ春の夜てられて　莧
脱かしらの手かへかなよかゝる　里
雀（カラ）の字や拵みて渡る鶴の声　馬莧
てりふ空ふ岸の相りのりき月　沾画
立盃を置てまゐれば秋薄く　里画
姫川しなるをのもく車酒　莧
家に来る若く舎ふ子孫又衣人　沾
葉をもいて升の洗足　里
悔しさもかしくの一歩のゆくそてかよ　莧
清け嬢なくて葉こふりまそる　沾

よもきさる葉がれ秀氣きこえなし　里
木ふり出しける西方乃岩　芜
何もかもおくれてさきし駒迎　沾
風に身をかるゝ子稲の穂の月　里
座所秋の値ほとをへて　芜
身は乃むすとて女房呼ゝり　沾
内まつる伊勢の熊野の年籠て　里
書きよこしけれぞぬ一通　芜
傀儡の声のみてききし花ざかり　沾
香の鋪かへる年乃森纏　里
嵯乃庭まへ八景を掃残し　芜
ちとなぬ命長く折ふし死ぬる　沾

年くれに座をうら亡きと申無く　里
之将歟賀の前乃さてむせや　芜
けの実みにしゃる茄子の初盛て　沾
あそめむ麦をそよ刈て見る　里
にしに寺の構図を出建し　芜
屋のお主のあとハ洗して　沾
猿をつくままさへうぬ小高　里
畢下して座するよれ科理人　芜
肌入くせ秋日にしりの暮れ月　沾
部にてかるし毛　笹の露　里
比魚も實の母親あとを問ふく　芜
をせ付て折　初羽の庭内　沾

虫のこゑきく障子附のかゝへ物　里

寛ら氣保よき杉苗乃風　莧

花見にけ葉を三縁子の舞之　沾

あし田の出乃かゝくりけり　里

いさみ立鷹引すゆる嵐哉　里圃

冬はまさきの霜ながら飛　沾圃

大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉

上下ともに朝茶のむ秋　馬莧

町切に月見の頭の集り　沾

荷がちらちらと通る馬次　里

智恵儀の智有れ鳴物とりて　莧

はらゝれ後ぞ楓はやく　沾

姐の難を承をうけなかし　里

月利て家をよれ荒しけり　莧

怖而を強訴の飛脚待ちて　沾

まだ七川わたらぬ日の数　里

草の葉にこぼるゝ花ちらす　莧

修路つよつよ綿とりの雨　沾

くさ嫁を聟しつゝ振ふ宿　里

宵の月さしつゝさそふ　莧

寒舟の花の中よりはつとあく　沾

柳の緑へ門をたてけり　里

百姓になりて世間も長閑さよ　芭
こがたなを借に行し先留守　沾
濃柿の渋ぶつゝみおろし蚕　里
りふのありさゝそゝりさせぬ　芭
砂を造人蒜の中の緒線の寺　沾
別を人にいひ出せば泣　里
火燵の火いけて膳をと寄せ　芭
一石ぬめゝし雁乃来　沾
折しハ寒月の照る天気哉　里
修よか蔵のちうふ長ささ　芭
月影にこしらへてこを頒てける　沾
おもひのまゝに早稲で屋根ふく　里

多掛小娘を呼りて眠のさまさ　芭
急てゐの気をとりて仕まふる　沾
花のあと郷の婿の高りいらい　里
寺のかけたる山際の木　芭
手まりさえなうあしはの野　沾
一夜隣くあかてうつす見　里
一

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日は寒けれど静なる岳　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鷄があかるとやゝ雨ふれる内
通りものゝなくなれは又出よとつる秋
盆ちかく一荷で直きる鮎の魚
宝登の瓣をならしすまひの
聟が来てにつともいはず物語
中国よりの状の吉左右
其日乃月見ゑて人やら禅寺れ
一疋の馬鐡が先て走つける
きさんしうまき気のにの桃楓
山の中門あるとまり日の内
秋あしし畠乃人のうけさうり
九條光る演乃小鰯

蕉 考 然 蕉 考 然 蕉 考 然 考

見えて通る紀三井寺花の咲かゝり
若枝にそしかしりたしら永き日
こちら風の又雨はあちり北よ寒
わかう夫に膝を大きらし経く
枝呼の肉後かし老窓の起あかう
喧嘩のさしきも見まくやれぬ
大せんなる日々二日立しまちは鐘
音うきわけし中乃とろかし
来る御の番に掛をまく家郎
奥乃世道りて迎ひ年の紀
酒よりも肴のやゝうく肉えて
赤鰯犯とこ庵の座面

蕉 考 然 蕉 考 然 蕉 考 然 考 然

定まらぬ娘乃心されまつて見え　蕉
麻汗のしみるゝ紐のこの愛　考
手綱をはなしておこれ松の風　我
大エつむひ乃惠る雪ゆる　蕉
米搗もかふかきよしいそ涼るし　考
うき身て市の中を押あふ　蕉
此あたり汲ば去年のけもなくて　我
野の池のまくめけぬ奏　考

今霄紙

野盤子
支考

今年は六月十六日のよるなかにかぎり月は東方の紅山にかゝげ涼しく常の澗水の秋をふくむに是

そこ宵乃あるそむちし見より窓早乃席をくるね
と志そうし稲くこゝに人をしくよ涼をみて共に
思ひ出をおもふに病してかゝりなりぬ人を合せて
無せしくんむしにあし縁とあふゆらふ弁乃ゑふくを
なりしめんは唯岸乃あふにきこゆ我の奥を遊
むるさかとくふそ侍りける昔の曲は涼川の草庵に伴ふ
乃まつ杖をうちてさし八ヶ日さしかくれあかゝ山を
涼りく浮世乃山をに父母の古墳をとふらむ洛乃
洪福山に旅寝してかの祇園乃涼をみもしくよ
それかくしてや此山にまか秋をすくれん年をと思ふにいさゝか
澗水の涼をとゝまれるとて中ごろ三四里も北景を清て
宗よ草鞋乃かゝるをとゝむ今宵をも営師氏にあそし

とよて偽あり偽あり偽ありて偽に似たるもの一句とて
そのうへ文乃句ハ只のものを松川の岸の小松をみる
ゆふべし涼りしもなきこの句の味をしらして人ある
まじ武尊はつらしかりし人くしの古しさまて
ことさられかれくおのつからまろくなる笑人乃教り
うちいでてあるべし新涼に月もかしこまりて遁まで
亀の背なる此を何事も古さる事の有べしと心さしけれし
支考ぎは此故乃言に任て其流の附句乃比喩を
此人生をなするを桐の葉となりてまた此の俳諧のおもひ
乃帝ちりとやうくる五ツかれて以の後は程にもあらし
のまま去年のこと今日の有様のそく明年は今も正しき
ら人今日の無妻祈を何とする事なくありと申遊ひ

頼みのまなかの句ハ四睡盃乃数ぞ手をそめつらんと
たそかれあらねね

夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
露をもつてや蓮乃掃気　曲翠
螢をいつもの筵にまくと入る　游高
青き葉の夏を揃へおし込　惟然
月影の雲ちらちらと雲乃峯　支考
志まつく鳩をなる雁かな　芭蕉
鵜を粉鳩の方へ進みみし　栄
山うしろ名をとおくきつれ　高
飯椎なる面構さまさま大寺様　我

むかしは土塀をまそほに照らし　考
あれたる寺はよすから樗の花　蕪
持佛のうへよ夕日さし込　樂
平畦に菜を蒔手したたこ泥　考
秋風けふは門乃若風呂　我
馬引く結ひ袖に月乃影　高
尾張でうきしほらの魚よある　蕪
餘所乃こころしの尊よあるるて　樂
正月こともて襟もすこきたれ　高
春風よ花の陰のゆりかたる也　我
藪うし村へぬけるうら道　考
喰ふねるね聲も嚊もはきりて　蕪

何その時を山伏によりし経　樂
無阿はことも樗よ付ておさみ花　高
蕨ではなる卯月桃て赤　蕪
おゐ出と紀生える阿矢来の町　考
涼乃日しれよ雪の氣色　我
春こころ無き酒の引ける　樂
無かえの身を身へあつける　高
封付し文ふ来る月の名　蕪
そろそろく盃乃上着衣　考
雨降つる四条の角乃河原町　我
ころ瀬をあくる夜一国　樂
今乃百ふ縫をえらくて橋の上　高

大キな鐘はさんによゆる　孫

世なるも花ぞ扇おしはせて　考

膝わけつゝし花相乃下　ま

春之部

花　桜

温石れあくつゝて春暮をもかり桜　露沾

森府にも又々内々もかり桜　其角

彰まね白も山よ翻さゆる　芭蕉

ちゝやかの段々る花の山　洞木

角つるし人をかしらや花の友　丈艸

花数々作つる影の手をさとさゝ哉　洒堂

冨貴なる酒屋にかそひて文君に

凡書碑のきこそれは見ひそてらるに

酒屋よ琴のまる世に宮の花　惟然

賭ふして降かされよりわる桜　支考

人のきもかく云親かしもかり桜　沾徳

えゝる日や母一の花のわが面　桂鈍

七月より花見よおてふ女中かな　陽和

見る所たり八両やもかさゝる　乙刎

咲花も哀つうしきなる老木かな　木昌

ゑ屋や春かるてみゑもかり桜　沾荷

二の膳やさされる吹込鰯め臭　子珊

葉出犾出るまよしく桜哉　卓袋

田家

藷蕷乃名地をとらんや海棠　李里

咲かゝる花や飯菜の十石　挑首

山門に花ミのこし木の葉より　一桐

なら花木の根やあらそ花の源　如雪

花笠をまゝらく似合ぬ人も濡　甚角

さ花やされ来るまてん花の本　少年 一嶝

めりあれ程の吉野や折の花　皐岱

一月を花見のあてや日和寺　治圃

八重桜ミ京に近き東ミ　仝

若葉

濡桜や若葉に紛れてあかくれる　嵐雪

糸の帰やむ烟の若葉に哉　曲翠

夕陰乃彩まきてゆるかゝ若葉哉　孤屋

一かぬ乃牡丹をうちまき若葉哉　尾頭

梅 附柳

其ちやミやミこしの上月と梅　芭蕉

武蔵野や大名翔も旅の梅　飛水

守梅乃あるじ業たる母老賣　甚角

里坊に梅さくやちの梅　昌義

投入や梅のまゝそ藪のなら　良品

梅償の尾とく梅の先がらの外　鳥白

あくらし紀最藤ことさき梅花　万乎

荷ぬ売や梅の徳まて下駄の跡　莫日

まつ梅やたしか家宅に苦さなきり　千川

寝ぬや梅の匂ひをとめて錦らん　大冊

天神のやしろに詣て

守らけりと祈るや梅乃雛さ八　遊糸

そよれくの猿のなりや梅柳　千那

時しもあれ春の川やなき　丈元

ちくりんを撒へちらしや古柳　江東李由

まつ柳の春にされてまたるれ曲　九言

猫をとりける宝通る柳しけ　巴丈

鳥　附魚

鶯に太刀かく除兼葭かな　其角

うくひすや舞を振餞の風呂あかり　史邦

鶯にわりし休めむかふしかと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

猿壺も出しけと雛のかくれ家　去来

まつ気や蓋くれん雉子やうす　正堅

鶏なれ肩のさやさねる根あ　傘下

こゆるの香に似合しき白紙屋　長虹

燕や田をわりつくれ馬のあと　野童

日暮れ中や牙をよ細して出や燕　峯嵐

雀子や娘よもひし雛の枕　掘市

雲雀こりふ気のし寝の子翩外　河瓢

鴨やとまし風につれての板橋ぞ

芳野なる河乃猿

鮎乃子やなすなも流し瀬の音　士芳

かけろふをおよきつく小鮎かな　圃水

こつ魚の一かたまりや波かしら　子珊

白魚のしろさは腸も清き也　山蜂

深川にあそひて

しら魚をとらへさする四つ手網　宅角

春草

なくりても萌出る草やまた起上り　正秀

若艸や松ふみつけた磯の石　此筋

春乃艸やいつれの草も花之　尼羽紅

川淀や泡をやとむるあしの角　猿雛

蘆乃角たるや土筆の長さくらう　闇指

味ひや櫻の花はよめかなしき　東本

菜の花の咲よりふかめの見出さる　荒雀

堤よりころひ落れてもとられけり　馬莧

端まとひ去堤の切目や蕗の塔　桃候

嫁菜の形は花さく大根　乃龍

早蕨や峯より山の杉の下　正秀

こゝそ紀尾の山に肥る三葉芹　夕可

日乃影は猫の抓あれ独活芽かな　一桐

蒲公英やいかなる子をとくらぬ花さかり　圃福

猫恋　附胡蝶

恋猫や月はかな緑帰　猫乃恋　採丸

うかれては寐へても猫の幾恰　支考

おのひとつ○乃比里ありける此誹諧に　已百
白日志かりろ也

世をまりても翅を動く胡蝶かな　柳枝
衣更着のうさ○やそれ蝶の胴　推然
蝶の舞おつる枝まらしろくな　園枯
風吹る舞の出来さる小蝶かな　嘉をわ
至り寝して花まとせりし出放蝶かな　雪窓

春鹿

旅おもしろや鹿の此しる角の角　沢雄

耕

妙なる菊の青しるあてきさて麻　木芸
苗札や笠路をふよし白月夜　紅筋

千刈乃田をせりとありて雑院人　一箪

桃 附椿

白桃や志らいくも花乃友　桃隣
今様をする空きうりの花のそ　介我
依々ぬ世を春秋の上乃花の露　雪芝
椿さくのかもしれんの記　水鴎
花さいて桃や舞数の胆躍　其角

江東乃李由か祖父の廬旧の話するに
杖のし経文読のおつる小路の光明といひ出るを

小服紗に光をやふせ玉つばき　角上
積もる枝に庭に花咲椿の郷　残香
うたあけくつろのや椿の花その光　羽木

ちりつもり あまりのちさん 捨てまか　丹波

山吹や 堰に干さるれ 葉一まき　園指

款冬　附郷題発

田家の人に対して

山吹も 散るを忘れ 鮹かまれ　洒堂

塔おてんほとしの 株や 畦のよそ　雪芝

叢喚や 積る重に 悲しく 茶乃花　荊口

春月

山乃端を ちらちら魚や 春乃月　長崎 魯町

春雨　附春雷蛙

枕よりきき 草の花より 春乃雨　荊口

時き 潮子合乃 春乃雨　乃龍

春雨や 唐丸あくる 草戸ところ　遊刀

衣かうしたるる武江の旅店を尋ねける日

春雨や 枕くずし たる夜なかに　支考

まるる島や 出つとうろの 紙燭　桃首

浪の音や 追さまされ 蛍　風麦

切腹くや 誰乃吊る 不乃邊　風睡

汐干

乃なつき 帆乃浪 まるる 汐干まで　去来

明月に 富士見 新藤 汐干まで　園指

新春

出かけりや あまれ 鉤る まかけ　許六

若艸や まるに 越る 桐乃苗　風睡

見やこ乃松のさくらや花さかり　土芳

うけらふや巌に腰乃掛ちかく　配力

小菜花さらんめくつれや瀬浴の宮　万子

数多毎り榾浴や那智や旅の中　苔蘇

赤坂見えん夜かくれ夜ぬけ来　均水

末乃見や菜れ末乃中れ小室節　正秀

三尺乃鯉とめ数て沙汰れ庵　仙化

引当れ牌よ走る田螺より　支孫

三月

撒水を白鳥より氷の名残か　支考

寛旦

菜乃花やすみだの川のきさ霞氷　少年 武仙

莚道八年のうすくれ立所か　百歳

鶯や離るるこの里浴く坂　尚白

蓬莱其年のうつつか螺乃貝　園落

姥すす乃数なつ小や露を姫　山蜂

待ふ心に衣裳を顛倒するの

主をまつ夫の文ま我にしても待るを

元日や我ふりたるさるの表　千川

人もこぬ春や幾乃さられ柿　芭蕉

明ぬ秋の夕のふられ夜あろ名　其角

襟の辺阿弥陀まつつや春ぞ近き　嵐雪

菜畑や大根出つゝて松の陰　去来

ぶらふ橋つまする初鶯こ乃都　土芳

くら川までやよく住てゐる宇須法　風膳
みな年孫をまうけゝく

元日やまさに伴なりれ梅乃花　猿雖

子もちもまり川無佐や花ひらき　蔦宇

脊まさら村へ一梅を見せよ花の庵　朶竜

歯朶乃葉にこえて色尾れ鯛かな　耕雪

鮭乃贄の京見とかく初日穴　允柳

くら川まちや年も若狭の白比丘尼　前川

枇杷乃葉の様に性し初霞　斜嶺

世乃業や餅をあれよ若夷　山蜂

湯ひらや大かたけの初日哉　任行

元日や座のまらうどさ猫乃子器　竹戸

家々とらへに擬すゑまりり　芭示

梅雲や餅まやとうたの走会　沾圃

色かしろ乃日まで柳さ　圃角

夏之部

郭公

暁乃雷をさそふ野かなきれ　其角

法さく声に啼や海きのさく濁　丈艸

きゝ度やわをまつけふかなきれ　多云

蜀魄啼ぬ夜白し朝熊山　支考

鳴かけの声ふもせりあふかなきれ　如雪

燕の飛あしむ字やかなきれ　芦本

淀よりも勢田ハあつけなし　子規

此句ハ石山の芭蕉庵にて蟬の吟して通りけるとや

郭公かさんの森や中やどり　沾圃

木　附草花

橙や日にこかれたる夏木立　闌指

里しのぬけりぬ夏木立　世荻

園中　二句

竹中乃古木をいつれ桐乃花　此筋

手切のさまも桐の花ふ　千川

姫百合や上よりさかる蛛の糸　素龍

題山家之百合

青くさやうき緑を隠る百合花　支考

山のはのおのれて咲や杜若　尾頭

冷汁ハすましきりたり杜若　沾圃

手のとくれ夏源氏かな　イカ 嵐蘭

夏菊や茄子の花ハ先へさく　拙候

そなた庵乃花鳥

豆うゑや日暮のれたる花盛　沾圃

みな新そや碎くる出し家の窓　芭蕉

夕がほや裸くおきて夜すがら　六人 嵐蘭

蓮のはなをちよせて入江かな　砂香

蘭乃花水の濁りか　此筋

蓮の葉や水にさかさに離れ　白雪

容あらし古池に蓮の蠅かな　言水

瓜

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

那ぬうりや袖に入てもさめぬらん　垂暁

森おちる種を出されぬ牡丹外　風強

早苗

京入や多羽乃田植乃時る中　去来　外七

早乙女に結んでやらん笠の紐　園指

御ふる月の植ふられる早苗外　烏日

田植哥すゝてける颯の風に出し　素行

一田づゝ行めぐりてや水乃音　少枝

里の子が燕握る早苗かな　支考

螢

蚊遣火の烟にそれてありく哉　許六

三日月に草乃螢を明にけり　丹兼

納涼

涼しさや竹握り行藪つゝみ　半残

宵花菓や夜草葉むしる夕涼　惟然

添川の菴に寄て

きせ給菜ふや風あぶうち我涼　東邦

涼しさやかゝる銘を出ての縄にさゝ　野童

石ばしや裏門明くタ涼さ　去来共　土芳

涼しさを牛乃尾振て川の中　万乎

漫興　三句

勝かけく中ふ涼しき隣すか那　洒堂

涼しさや楊より足をぬらしける　文考

生ラ碎も縁ちるくぬくる涼かな　素堂

　ときは紙羽を着たるむきて

涼風も出るしき涼みのこかれか　遊刀

いとうしき中をぬける涼み哉　仝

立ありく人にまぎれて涼みかな　去来

黙禮にこまる涼や石の上　正秀

職人の帷子きたる夕かな　土芳

涼しさや一重羽織の風たまり　我眉

水涼やむかしの無き月夜哉　里圃

暑之

かさゝきや照りかゝやきし庵の隅　此筋

雲立るつ無の布さりの暑さ哉　万乎

　薬醫者の時見えしに暑人待る

実ふすとハ涼しく森陰の暑さ哉　正秀

氷葛の内のあつさそ梅流かひ　乙州

媒さるる日暑かりし座所　怒風

蓑虫ふ頬も去すしぬ暑さ哉　素龍

草乃戸や暑さを身に九らくれ　帝峰

一つぶ目や扇をうちわ[illegible]　木吾

積あけく暑さ[illegible]　卓袋

稚ふ家ある鮑も散乃かつさ哉　里東

立[illegible]かちやの暑さ哉　沾圃

竹乃子

筍はぬけつゝ岩乃崩ゝ那　可誠
いわ竹や畑乃出る薄重此窓　曲渓

五月雨　附夕立

あつ嘆るやまくもたつゝれ黴雨の中　不玉
さみたれや蚕煩ふ桑乃畑　芭蕉
五月雨や蝗まされぬ殘つゐ　沾圃
夕立にさし合けり日傘　拙候
白雨や蓮乃葉たくも池乃芦　呂蘇
夕立やちらしかける竹の皮　暁鳥
出かゝる傘も出やま一町　圃水

蟬

白雨や中戻りして蟬乃聲　正秀
きり／＼と出て啼く物り蟬の聲　胡故
声乃蟬涼しき聲や引つき聲　乙州
蟬啼やぬの織る窓の夕日影
こりを　暁鳥
蓉乃月や湖ゝ入る月夜かな　菜拾

雑夏

豊年して手乃動やむ囮の那　杉風
雨乃後ふ夏草ゝ分やま此畑　洲口
夏瘦も秋のひの中のひとつく　如真
川稲よいてし
ゑら燒や麦かけく風ゑ析鯇　文鳥

美草に戻りかゝるや園の蘇　只牢

夕風に吹るゝも志づや酒ばやし　永齢

労はるところには毎とやすみて

魚汲ある幸も汲れ浪うちて　一堯

横からきや箆かきむく日乃面　重[illegible]

泥濘や道付ゆる雨のあと　[illegible]

蠟燭の川崖乃そゝぎ哉　水酔

晋乃渕明をこゝろむ

窓形ぞ蘆森乃蔓や篁　乙哉

糸にのまや帷子がゝる簑森哉　帷然

[illegible]のうしこゑの乃[illegible]

る谷くよきも宿に夜月の泊楼六

扇つかひて世にふる文なる

帷子乃袖ひきやれし綫ぬ百　支考

秋之部

名月

名月は雄葉の音や田乃くまま　乙哉

名月の花とみえて棉畠

こハ八浜坂のあてにて名月乃夜之の二句

をかし出して是れ是いつれも雅なる人と称り

しれけるかのうへにれ月を川する秋の花ハ

されはかりの内も名あるくさを翫ひこのうちをも

図经ありしのあとりてされし梅原主寄撰り

あるかれなく平田衝しと旱なり、これは老杜が
峰雲のこたへにと見えたり。なるべし
その次乃柿をさけといふ蕭条にしてなをさ
やかならで今乃この句所乃一節に彼あるに
月乃さつしのことや八なるひとりを花とおもへ
まつしくおりひやうされ八花に清香あり月
に陰ありて是も詩に寄すものなりをよくれて八
前八寂寞をむねとし後八風光をとり
こころん君こころ何を是非とさたむる事を
なさむとて後の人をまあるべし 支考評

名月乃海より冷る田子乃浦 洒堂

明月や霧かしかし北ハ敦賀の月 如行
ゆふの露乃芦根にうつる月見かな 露沾
雌はりあらしはさかひや見えぬ女角 智月
名月や長屋の陰を人の行 園楷
明月や更科よりのまはり衆 涼菟
明月や灰吹捨る陰もなし 不玉
中加乃梨子ま影のつく月見哉 梳刀
名月や草のくらきに白き花 左柳
明月や遠見の松に人もなし 園女
杉むら氣もなくてあかあかや明月 山蟬
明月や座頭のねまに八門あけて 風国
名月や四五人乗し艜船 霄奘

老の身もことし今宵乃月も見てむ　辛安

明月よかゝれし星れゆかれし　沾竹

山路乃山田ふおりて昔の庵ぞ見ん

主人の附

二見まで庵送りぬる月見かな　素秀

芥子蒔し畑まで行ん月見かな　空牙

柳の名残を脚と庵に月見かな　如真

山まかれちらつくも海也峯の月　京比

名月や里乃ふかひのまきの宗　木枝

場にかく月見なしや慈桟　利合

明月やおまかし御しき　女中方　丹楓

滑るや何もひろうは表の道　野荻

舟入乃客ふ手をとゞ河月見かな　正秀

淀川のわたりの日をとらへして

舟引乃かげによりけて月見かな　丈草

待宵乃月に宿しや定飛脚　京紙

家子三売茶のふるまいう七夕の壁々
秋して待く待りしところかく

蟋蟀を閣ふのせるやにる乃月　沾圃

家おきく月入あしや壁の西　馬見

蕎麦うつ月をおもらぬ稽弐　里東

月影や海乃こゝろ堂長廊下　繁笙

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜をわつかに闇乃初かな　令

いさよひハ闇のこゝろもすゝしさの哉　楳雄

七夕

文月や天田の上のあまの河　惟然

星合を見て来く淋れ船しれ　涼葉

秋晴りの雲去ちりてやすしの秋　東湖

五節ちるさいつある緋よやそふ金　治圃

秋風や薫姫乃国まち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に仰向を秋の秋　露川

秋来るや中に吹る雲の峯　北次

穐草

秋草の花透通る桔梗哉　柳梅

細工にもなりぬ桔梗のつぼみ哉　随友

女郎花ねびぬ馬骨の姿哉　酒子

をみなへし藤袴の枝に余乃れ哉　富光

一本の女郎花よりし畑かな　烏栗

弓圍ぞなれなれや萩てうぬ　支浪

桔梗　芭蕉庵

百合の色茎を経の念哉　風吏

ちよ姫のたゝすむ寝濃花　史邦

桔のはるゝ草にかゝるや鶏頭花　万乎

鶏頭や雁の来る時なをあかし　芭蕉

鶏頭のたゝすむ日数哉　至曉

折〳〵や雨戸にさはる荻の声　雪芝

萎れ葉やちりしれ動く秋の風　荷兮

山人乃足擲きすてられしるゝ　賀州 桃妖

風無し長くて魚くりすかな　杖下

鶉かな

鶉から茶の木さへに宮落日哉　里紀

あさかほの這ふてさかえ柳かな　園指

ほしものゝ緞衣きて紅葉の舟　風雲

秋良に老のまかれし人や蛍帽子　其角

雁　附鳥

きぬ〳〵しれ傷に練むれとうれ　女 可南

鶺鴒や朝に孤立ち妨くる棚　北枝

火乃消て胴にこたゆる鹿乃声　正秀

秋乃秋や蚤と軒とまる蛍　水鴎

こゝ虫や形に似合し月の影　杜若

蜻蛉や何乃味ある竿乃先　擲九

蟷螂や拳をとひや石の上　蔦雫

蓮の実に聊さそつて蝉の声　示峯

ぬけからにならひて死る秋のせミ　丈草

鳴くとても中〳〵浦乃苫屋形　馬莧

鶺鴒や走り出ても白川原　氷固

粟の穂を見あぐる時や啼鶉　支考

老乃名乃ありとも知らで四十雀　芭蕉

秋風

秋かぜや二番たてこの稲かせけり　遊刀

雀子乃髭も黒むや秋の風　武之

行あきとかへらしゆく秋乃風　支考

松乃葉や細きも似せし秋の露　風国

そのまゝ草乃末葉へしみ入けり　團識

ぬれながら夜やむすぶつらき露　九吉

あれして寺は淋し鐘の声　林雅

稲妻

ひらりひらと闇を抱起し稲の花　一東

稲妻や空にたゞよふ海の上　京兆

酒かのや稲づまうつる窓乃端　土芳

いなづまや闇乃方行五位の聲　芭蕉

木實　附茸

團栗乃落て飛よりはねにけり　浪香

岩焼に柿たのむ俊ぐれかな　去来

秋寒や目をとゞめたる枝のうら　酒堂

行くゞと帯をとりて枝こそ　也葉

きの茸や塩にも漬ず一さかり　沾圃

伊賀乃山中に阿叟の
留守と聞て

松茸や狂はちらされ山乃形　惟然

[illegible]

[illegible]

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

淺茅乃塀にまかれてちる紅葉　小雛

麻

尻からけに秋惜乃麻也風の音　風睡

麻かつくに麻刈ころん昨日今日　一酌

蕎麦

蕎麦しらぬ人を連てや蕎麦の花　東看

山本ふかに裡もむこうそ蕎麦畠　貫山

さ海ぬけるたまてくまし蕎の稲　如雪

此勢乃手段に出家をとりれて

蕎麦ハまた花てもてなれ山路かな　芭蕉

早稲刈て蕎麦つまうや小百姓　乃詠

山雀乃出てしれ帰家乃稲　手提

稲刈うきし河原鶺鴒小菜畠　支考

一家乃ちるや芋乃葉ゆんとき刈　仝

肌さむき婚よあらし蕎麦のさき　唯然

百なりてしけつる梅を唐がらし　木菅

去年河原にあそふて拾ひよみの

孫まで返りて

その後る也西瓜上戸乃花乃種　治圃

菊

名月乃草二百十日も恙なし　舊宋

垂れまし子やさと白菊乃玉牡丹　溯子

煮出本鍋乃中に来て菊乃花　支考

發句二條

すゝきさゝやかゝる山路乃菊の香　兀峯

借りけし露の情やりんの菊　丈草

暮秋

塵塚や春有てこそ悔る秋乃暮　野水

行秋を鼓弓乃糸の恨かな　乙州

行秋や手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雜秋

五六十海老はおやして鰕一ツ　之道

栗かしけ北山家伽して松乃中　園女

あしらひする比膝ぶし遠くなるを外　畦止

殊る敷也落花付出る秋の雨　口友

身ゆるめよ常[illegible]ことりて鞁この形　猿子

交る[illegible]や稲こく家乃[illegible]　万年

柳乃[illegible]殘ミて盛て人[illegible]乃有　東門 東波

[illegible]の宅に[illegible]の留鼓をうけへて[illegible]の[illegible]にうけつゝ[illegible]それたしハこのあたりに[illegible]かの龍鱗を穂として[illegible]をうつさるゝ[illegible]このまゝ[illegible]さらしにみて

稲つむや[illegible]乃やところ　支石

蕉乃穂

冬之部

時雨　附紀

この比の垣の結目やはつ時雨　野坡

ちられまた又松風の只ぞのみ　少椎

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨させてくるりと月新られ　孫治

初しくれ小鶴の羊の蓑如織　吾㒵

平押まゝ及田くりる時雨かな　兆舟

宗董や時雨の火吹廻りし　闌桁

梔董もきりよ芳船の初時雨　空牙

究竟の如くまゝ引込時雨哉　而有

宮守や時雨まつ一しくれ　露口

衣すゝく香炉をぬらす時雨かな　野荻

柳色も見知もなうや山の時雨　許六

こゝろより古くする里を森時雨　里圃

浮雲をそゝきの芹はまきまきろの
月影のりをうそあれさそりの枕

沖時雨の船日くらし初時雨かな　沾圃

まり川ちれや大乃土かく風の経　小録

蕎麦川畑や一葉し枕の雪　素考

元禄癸酉之初冬九日　素堂

菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ
侍る事はその比は花いまだめくみも

やつれ菊花ひらく時則すなはちと
ひく阿古と云ふもの出て展すなはち
の盃あらしなきにもあらず雅
秋菊を称して人くどすめれ
ぬるまよかりぬ

菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉

柚乃色や起あかりたる菊の露　長角

菊乃気味ふかき境や藪の中　桃隣

八専乃雨や河川中深菊の寄　沾圃

何魚乃かさしに籠ん菊乃枝　芳麦

菊畠客も圍　中まどにしぼり　高覚

柴栗乃限士ず弦乃琴を教しよ

むかし菊は梅の大かんすをとぞさ
かり造化もかくは及ばじ今の菊
とまかりくさのつくるをよそほふを
ありさまは菊作りて琴かけ
さらにはしんやよしとて人見行同哉
素琴を遣しけしより見を夕
かし気を静めてあらしと声
あきに聴きあらき風音しら吟く
せし月しやとりぬ

とりしせぬ琴や似しぬ菊の友　素堂

草　附木

長絵や請蛛さらし日和透る　曲翠

な城清く咲やまかきの水仙花　水面
水仙乃花のこされや藪屋しき　惟然
范蠡ヲ趙南のもちたる
山家集乃頭ニ書す
一露もこぼさぬ菊乃氷かな　はせを
山茶花を元より白く咲る花　車庸
冬梅乃咲しくれやなかれ哉　土芳
山茶花も落てや土に散積　露笠

木葉　附冬枯　凩

初めは冬しき木乃葉ちる里の数　沾徒
冒されて江の船出しむ落葉かな　露沾
冬川や木の葉ハ黒き岩の間　惟然

葉より足さりよき木乃葉かな　枳風
なを祈哲宗此乃庵とふらふ迄て
老いるより此夕ぐれぐれ落葉哉　一道
枯れて霜ふる木のもと哉　杉風
牛乃死る枯野のそらし兆ぬ　丸雅
みる枯ふ未摩きてところ度し　乃務
草枯ふ見つくしぬ暁かり　利牛
冊を枯てのなれゆあし茶の宿　支考
木からしや色にも見えず散もせず　智月
凩や背中ふかるゝ牛乃歩　風介
木枯や刈田乃畔乃鉄気水　惟然
こがらしや藁まきちらし牛の角　塵生

夷講

ゑびす講酢売に袴着せにけり　芭蕉

えびす講鶴も鴨になりけり　利合

鳥　附いを

乃空乃海をさゝく

塩浜に負てぬるも千し浦衛　向空

進みけり菟まころふ千鳥かな　萬栄

小夜ちどり庚申まちの舟屋敷　丈草

入海や礎の釜に帰る鴨　嵐指

篭にはりて ぬくし鴨の足　芭蕉

さゝ川鴨を大進ひるゝさしけれ　之人 作木

汲汐まてみる入ての生海鼠哉　利空

うつくしく海月に見ゆるなまこ哉　車庸

見えし遠や子持ちしの乃ならぬ氷　依水

一ト時に初白魚や宮の前　杉風

かくて婦川や鱗をふろへて浮寝哉　拙候

杜夫魚を河豚の大きさや水上よぶ

鮒の川よのとあるうおあり

冬月　附衾

嘘よの門ありあるく夜の庭　里圃

おし猫のかけ出れ新やその月　丈草

何ともなく藤入手まく夜の紙燭哉　小春

手燭や門を出れて江の夜哉　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

焼しさる表を魚をるや雄鶏　廿年 杣先

自由さや夜を遊びの垂火燵　洞木

宮

初宮も門は梅あり夕月夜　其角

枯てしや自宮にほき酒の味　仝

霊あらし拙心のうつろになりけり　夕葉

鶺鴒家をとゝさうくもなし宮　祐甫

宮頃や走しぬ人みさ君の飯　嵩ほ

娘子川子も草鞋をかなや宮　支考

肝壁や宮津するすき縁　圃吟

宮ちかみの宮見や白萩の前後　文里

些判を隆ある宮は此の子け　陽和

修行大和なぞなる山や宮の紀　砂刀

神楽

我神の家の歯も喰ぬ夜かな　史邦

神楽かな

今日肘やさふしみ毛神楽かな　啄葉

御しむ千鮭貴をすし神楽　馬見

娘入の門も色あり神楽かな　許六

根を送りつくの神楽かな　沾圃

煤掃　附　飛つる

煤はきや嵐近は黄楊の中　珍香

煤はきやあつき日さかりふるしき紙　英逸

才覚を簾乃かけや煤つゐ鐘　言竟

煤はきやわすれて出る詠和　三ノ閏如

煤掃や新畳一枚踏ごゝく　惟拙

餅つきや火をかゝれる男ぶりや　岱水

雑煮さやあつきまゝ鶯のこゑや　嵐蕉

すゝ掃乃手傳山ゐるや小山伏　馬佛

歳暮　附春季ハ　衣砧

こゝ移る流れも師走の市のさゝ波　芝民

門松やさきて来る人の浪髪　里東

賣居やとりていふ人年の暮　華士

積もる日の作りまさんやとしの暮　車来

大年や釈子ともの旅姿ら　石平

袴きぬ婿入もあり年乃くれ　李由

年明年路をかけるん戦よの　史角

すゝこ小豆も市の師走か　正秀

引結ふ一様の泥やとしの暮　秋子

桶の輪乃出来て行年を見の暮　猿雖

天狗毛乃さかふさかして年の暮　惟然

浪藉を法世てとしの暮

けふ白き圖日も日九ゟ向人日より暮

のあかとて作家ふかかうて作り

それハさのゝしか暮ふりるすさ飛

結しても吹きなさ人ときかりし

盗人に逢ふた夜も有り年のくれ　芭蕉

金子に搗くとんとの霰の年忘　支考

湖は座禅所知らぬ年の中　土芳

菩季れや弱りて灯る薮の中　尚白

苗季みんの拍子とるらん鳴尾かな　中峯　桃隣

歳暮にも来のすすきぬ配　山蜂

一とせの嘘で静りし除夜の鐘　利合

雑之

小屏風に菫を描くる寒さかな　斜嵐

植竹に河風さわし夜の端　土芳

井の元のあてられぬる寒さかな　李下

寒さかなや山伏村の長将し　仙秋

宿かしておのがあけしや出来秋　團仙

火燵より露より付た蟷螂かな　雪芝

山路や猿が尻抓く冬の日向　土谷

俎板に人参の根の寒さかな　治圃

菊刈や冬たく薪の置所　杉風

釈教之部　附追善　哀傷

涅槃

涅槃像あくびは顔の見えぬなり　治圃

招きん金や鱗をかゆる珠数の音　芭蕉

山寺や猫守り居る涅槃像　不撤

貧福のまたとぞ立つや涅槃像　山蜂

灌仏

灌仏やいとしらぬ婦る奈良の町　曲翠

若葉やせ佛うまれて二三日　不玉

灌佛や釈迦と提婆は従弟どし　之道

葵祭

喰物もみな青くさし賀茂まつり　嵐雪

森の名のかゝしやうき葵祭も　去来

宮仕や娘をやる葵まつり　沾圃

甲戌の夏大津に侍しところの
まうけ消息でもれけれど田里に
ゆりて今年と以てむしよとて

蕗の葉に杖を立て鏡の墓来　芭蕉

悼少年　落

うあしさや床本の花青葉かな　惟然

その親をまりぬその子は秋の風　支考

うちくれ彩口寺に詣て

首の仲も稲妻の先と涙哉　李由

むしや稲妻すべる桶のかね　支梁

沈影讃

柳も柳もおくれたる沈影讃　沾圃

臘八

腸をさぐりてこんれく納豆汁　許六

何のあれかのあれ只ふき大師講　如行

雜部

冷泉の玉如堂子にて若き者の死去

閑林の題

涼しくも野山にみつる念仏かな　去来

あつさをも二たびさしてけしの花　智月

むし畑やちり去りゆりて佛達　乙州

こゝのふる川越回や富士の影　李由

手すちしれ野のら涼し夜念仏　北枝

食堂に雀啼なり夕しぐれ　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏はせを翁の別を見送りて

麦ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

別るゝや柳添かゝる坂の上　惟然

許六が木曽路に趣く時

旅人の心にも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より去来に語る時

氣ともなき翌乃芽をこかし見え　丈艸

鮎の子の白魚送る別かな　芭蕉

甲斐のこふのぬしに送りける時

岩根の山をうつりて

年よりて牛まのつなぐ嵩れ縁　木節

稀の母やうきをはなるゝ後の山　越人

あへてたゝくつゝみ川掉や旅の宿　兆佳

出羽の國におもむく時こゝろのくさ〴〵をしるして

ろれうゑ八谷晩せうくもし小夜嵐　丈羽

十団子も小粒になりぬ秋の風　許六

大名に藤ろうすら袖ぞるゝさきは　仝

にほ海辺にて

うらしさも菜をさし入川へ盆の旅　菊良

流れくるく弁く宿をる萩ある紅葉　猿雖

帆柱のまへあちこち見くらし旅姿　我峯

雲まはけく渺なるあらし鳴島　史邦

田園の心さしも猶かし侘者の文よみて

文字の扇ひろけを秋涼し　呂丸

我庵の団いてゝし旅のはつかな　洛圃

常陸の城より出むかへに宿をかりて

てやうもおんとせしにそのあかさりに

ありとて竹をとさりとけれ八一夜別の

乃都の木よ月かりの梅して

根よ藤る情や楳ふ小三端　支考

より凧や道ふるうつふ梅りし　仝

元禄三年の冬粟津の草庵より

武江におもむくとて嶋田の駅塚本か

家にいたりて

宿かりて名をなのらするしくれ哉　はせを

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名を
あら野といふ何故にこの名有る事をしらす予はるかに
おもひやるに一とせ此郷に旅寝せしおりおりの云捨
あつめて冬の日といふ其日かけ相続て春の日また
世にかゝやかすけにや衣更着やよひの空のけしき
柳桜の錦を争ひてふ鳥のおのかさまさまなる風情
につきていさゝか実をそこなふものもあれはにや
いとゆふのいとかすかなる心のはしの有かなきかに
たとりて姫ゆりのなにゝもつかす雲雀の大空にはなれて
無景のきはまりなき道芝のみちしるへせむと此
野の原の野守とはなれるへらし

元禄二年弥生　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これはこれはとはかり花の吉野山　貞室
家よしといはるゝ花のあるしかな　路通
落暑をけふくるれの林かな　信徒
てふれ山とことしさへて家をまもらむ　晨風
苔淋し花の後の鬼瓦　友五
山里は飡しの喜める花見哉　尚白
何ことそ花みる人の長刀　去来

みよし野の雲をこしハ花も晴しとや　野水

さかのかての夜ハ月て患る恋かな　亀洞

木の下の此宿といつれん花の宿　越人

花の山常折くるる枝もなし　一井

見ありしよりよるの花の顔　津島 俊似

兄弟のいろは何れの花の色　鼠弾

ちる花を酒ぬる人もなし　舟泉

冷汁ハ敷くるしや花の陰　胡及

さつ花よ陰か傘をつまはし　長虹

染舟の花咲そめの雨　津島 卜枝

かけよき花なくて迷りの花の枝　岐阜 路歩

連よつや従者ハおもし花の頃　若考

痛瘠の酒まさつ見ゆるとしの花は　傘下

おしきなや風車売花のさき　落梧

花なうこてこく人のくるる心かな　さつ

山おもの花と夕日の入出しち　心苗

折りしや理盧をかしよもの雲　鉄人

なまおもやさつ也よる花挿まま統　野水

福東く友遊ひの花やま　冬松

花なるここ夕ゝ昔ある尾上かは　冬文

首出して岩はなれたる蛙かな　荷兮

酒のみ居たる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の山家にいたりて

橿の木にかれるかたいぬすまし哉　仝

杜宇二十句

けしきんと鉛ゆくのみ來りて聲ふるよ

なる筆庵此夏夜周えつゝん郭公　李吟

月にたまちるふ山にきこえれ郭公か　素堂

ほとゝきす中よまくり蜀魄　洒雪

蝙蝠のひろさふつ也ほとゝきす　越人

ほとゝぎす子の日をまつ夜や時鳥　はやま松下

けや先ら鞍のつく雅鳥の郭公　重五

ほとゝきすきくむ雅の廣き　柳風

あの人のゝきて聲をせとしみそれて

ほとゝきすそらさきさき鳥このれ　嵐蝶

時鳥き後家のやたくさきれ　蒼梧

蜘蛛真に深きうつや時鳥　一髪

三声まで松の松うしや郭公　同

淀ふく　風泉

ほとゝきすれ十日も夜さ秋兵衛

聴しきや森の夜先の雨きれ　杏雨

物の客今起きく郭公　傘下

ちかせ力ふ侍しきたしおれ　同

ゐるとみるとおひるの郭公　純可

今をあり宵の雨を残ほと吟られれ　大津 智月

幸ふ夜ふ人にふ郭公　智月

子のうまくうつきもろうり郭公　李桃

しらしらと天の川そふかしくきん　千山

月　三十句

かるくしと笹のうへゆく月夜哉　梅古

きれうして月つかへる中の猫かな　端水

月みとつくひとりかちの今宵哉　一石

西の月ここもふしけ鳥かり　越人

名月よまさにお眠むく月夜哉　昌碧

座やなまの宵はさみしや月の影　津島　市柳

枯れ木に芽て添る月夜哉　一髪

とこまてもつゝく綱を月の光哉　長江

酔ますて硯枕く月つめう耶　任他

一つ金せいゑもとめるたふの月　亀洞

名月ハ夜明るきはてもなかりけり　越人

名月やよしよし十二六ゐことのこ　文鱗

名月やたゐほき身でさ浅草舟　昌碧

あつくやまうしてあまく宮の中　傘下

名月や鼓の声と犬の声　二水

見るものとしてはえて人の月見哉　[illegible]

名月の台よくさうや

出つきと月を見る日を火かし嬉し　荷兮

いつの月もあはれを忘れし　仝

名月や海もおもはす山かけん　去来

名月や下戸と上戸の出かはりき　胡及

めいけつハあるきたりけりぬ林かな　[illegible]

宵よ見し梢ちるらしや月の影　一蝶

十三夜

影峰さ雲に紛るゝ月夜哉　桃隣

朔日

暮いふ月の影なし海の果　其□

二日

見る人もたしかなき月の弓　今

三日

行年の見えてかゝる〔ママ〕の月　芭蕉

四日

夕月夜あんどんのして〔ママ〕　卜枝

五日

何日見えさる也宵の月　蘇泉

六日

銀川見るほとに比や月来ら　嵐声

七日

能なしにあらして帰る月夜哉　一蝶

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭しよみ酒の色　其角

笠ゆくの雪見まゝろ[illegible]　芭蕉

折乃雪[illegible]なく[illegible]　塵交

かさ[illegible]や岩[illegible]山鳥の山　加生

車座[illegible]　小春

くつかとつてうら熱を洗ひけり　越人
はつかれ戸嵯峨ぬけられ菴かな　芝幸
ものうけの娵ぬれもされ一ツ哉　松芳
ふりきあまた物語えてうめの暖　二水
雪ほと一る居をつる雀か桜　亀仙
板乃雲打とき与うた枝打人　淡路 除風
田子の月や川筋斗あそくしと　嘯門
梅ニ雀や打しふきるる手乃青蘂ゞ　傘下
雪乃江の大舟より八小舟ニの桜　芳川
雪乃船から鮭をたる声なるし　冬文
雪の暮椎子やそれしや雪の色　桂夕
あふしや浅雪かつげ酒強飯　黄之

利川雲やし先達座ぶ漂まて　路通
はつ枕し雲北見えぬもまり下　北水
舟うけていくか娵れたる海の宮　蕪村

歳旦

二日ふ晏粧りハせしふ花の春　董其
あれ人乃手から〳〵し花の春　古梵
ひゝゐやも元千年乃つゝく縄　風詠
松かざり伊勢か家賓人を迎　其角
うゐうす連歌ふあらためす　文鱗
肩宮の毛ふ春ふきし門の松　去来
かざりあふ打して年ふる栢かな　一晶
えん家や竹をふ々れ〳〵まされる　路通

元日ハ鳴すゆしさるゝかさゝき哉　ひめぢ 一笑

薗囲ひ梅の花さむ白紙哉　大坂 よくか 行

娘ら社吉和ちて寺様としの言　岐阜 落梧

若水をとうちかけて見よ常丸梅　亀泊

伊勢浦やほ木々植むる鮮の実　同

こゝえれ若をつゝてゝ見む高見梅　昌碧

去年の実ちゞいさうるしき芋哉　之廣

小桂子雪やひろこゑむまつのかと　舟泉

とし男ゟ社楽をあらひ入り　同

山葉ようし白まし俣竈ゟ哉　含西

松ゐるし引馬ほうし年抑とき　游雪

有花乃神を琵琶の舟よりこの家　全

連てきて子ゟは使せうり万歳楽　一井

さしゝ白も花ちる餅の名ゟ店哉　胡及

もんれわえむこそや新玉の年の海　長江

と祈ゟ紀て縄ぬしれしく柳哉　荷蟬

さる川やふるい比面をいとあらし哉　同

蓬莱や舟乃通のこゝんなくして　湍水

飾るも神をきゝし紀しゟ新の実　京 亡純

のゝえやとしの見てさいこの春ん　朴什

うきるにとたゝむひるかんたゝし哉　冬文

正月の魚のうしらや炭さゝし　傘下

久きれ春寂しかゝきゝ国この卵　冬松

あひゝゝは松若き門もれりしろや　柳風

文服ハ去年の素袷の白ひ哉　陸川

学ぶれ数ゝ守まいれ筆始して　大山 昌弥

傘よ歯朶うつりうえ方相　夕石

神すゝきく松の露ちきるそ松の春　梅舌

乙てらふむ霞やうつる大かゝミ　世水

曙と春の初やたうふくら　仝

まつ春れのそふれ若く質魚て　越人

初夢や溟名の橋のそれさ哉　仝

春けや春庵階よ手の畫屏　荷兮

万歳のやゝを蹴よ明よ夕もし　旧

己のとしや舟うしの長れ松ほつ素　旧

歳と春目うとえ立る十川毛哉　信 般齋

歳首は弐が若みゆ末なるも初の春人　息空

初春

若葉つむ沼を春を割 畑 哉　越人

精出して摘るふあぬ若菜哉　耶吉

七草を中られさうて沼子哉　俊似

女出て露さ川わとの若菜哉　加賀 小春

側溜く流の杉りさ 濃菜哉　荷雑

吾うゝものこしてとらぬ若菜哉　岐阜 素秋

不扱くつれさる梅折しなき　文素

座る宿く折ふりくりし梅乃ふ家　野坡

むし夫の杉もの宿よりゝぬりしき哉　越人

藪の人春れもとつまかちへ梅のむ　荷梧

曉乃納瓶にあつまる陽かけろふ　爲之

同

藪深く蝶氣のつかぬつゝじ哉　卜枝

麦畠

そる畠たい出来足一つことも麦哉　瑞水

同

麦の畠青やさしと妹てことと　五輝

雲尾鷹

ともゆきの疏つまづきし白尾哉　世まう

城氏井に英畠切つる案の哉　寄生

立印けし芥草つくり咽苦哉　十葉亀助

すゝくと鍬子摘みり法らくし　丹泉

麦の穂に葉のたれつゝる岸哉　不海

葉は茶や杉葉乃出合れあへしに　芝江

なのれ花のうへ家々にうつる月影哉　傘下

なの花の畦うちのこれ参ら哉　清明

うこくとも見へて畑うつ蘿哉　玄来

万歳を仕舞ふてうてる麦田かな　旨暁

つくさきておそくらてきらし哉　越人

廣き庭に一本植しさみしさ哉　笑艸

はまつし八蓑そうきろて咲まり　除風

手れとくほと色折られし桜哉　一橋

うしろより見つゝれぬ泥の桜かな　香松

匂ひしと山やくれ合る足さなし　一髪

もる風にちりうつりゆる雲や若葉哉　野水
あふのきに森さくむ若竹の若葉哉　除風
たる若葉ふりとむかふる花の雨これ　一雪
引かへし籠縄解てやる雉子哉　壇車
子をつらて斧中あくれ蛙かな　山陰 宗雅
鳴きつくいさもおひ出ぬかはつかな　落梧
あうつよをむつましさに鳴雉　越人
いくすへも骨折る岸のかはつ哉　去来
飛入くえ先はしらぬかはつ哉　落梧
不図と飛ぶ淀に居るも蛙哉　濃高 雲下
ゆふやみの唐網にゆるかはつかな　一井
まつ蝶を思ひの兄も見えぬ哉　柳風

櫻桐の葉にしまうて寝る胡蝶哉　柿餅
はやかる乃中をかいるてふ　炊玉
かれ芝や菜の葉ふうつる胡蝶　百歳

菫菜

河の氣もつゝめる古寺の菫かな　忠知
ねつこしと踏ふまれぬ菫哉　倚竹
あからくの土と成路を菫かな　野水
遺そうり日乃さん洞の菫哉　舟泉
草刈に菫選出ん童かな　路歩
引蝶乃日よ日を残さぬあさこそらか　焔遊
麦畑乃人見るさくる池塘哉　杜国
こけ山や猫乃肉のすこ　春 式之

ほろほろと山吹ちるか滝の音　芭蕉
松明に山吹咲けし夜の色　卅丞
山吹とてらすのさかれぬあらし哉　卜枝
一重なりし山吹のそく中々哉　岐阜 襟宮
とりはやく山吹のそくいそく哉　旧 蓮雨
あらそふても中々ともまつぬ燕哉　去来
去年の巣の土ぬり重ぬ燕哉　俊似
いま来てもいそぬすりの燕かれ　长之
燕の巣を取れはもとしえうかね　长虹
其聟はあてされるつく燕哉　嵐律
友植く吹きるかなや萩乃露　且藁
角落てやさしくも見ゆる小鹿哉　蕉笠

すごすごとつみやつまずや春の草　其角
すごすごと摘出るのせりも土筆　並笠
土筆やさみしさまぎるつくづくし　指車
川岸やゆるとのつまりつくづくし　冬文
淡くし那布にあかる土筆　素江
葉茎亭主人池に鵝を畜ひけれハ其筆意ある人の為之
池に鵝なし仮名書習ふ柳陰　素堂
風の吹方を後先柳かな　卅水
何事も知らして通れ柳哉　越人
さし柳して去年まで折りけらし　一笑
犬とりとめやあるにそぬる柳哉　小春
すられても柳ハ風にこともつかぬ　一笑

とゞまつて筏とゞむるやあさき水　昌碧
さゝれ石に髪のゆつらぬ柳かな　杏雨
うしろくて流れのうつく柳かな　此橋
吹風に牛のまさむく柳かな　杏雨
吹風に流るゝさよふするやけのさき水　松芳
うちふるぬ日をいつあるの柳かな　校遊
いそうしき世継をとゞまぬ柳かな　蒼亭
蜻蛉下みとゞく自の柳にさま　同
まゝ柳まゆるゝて通ん車かな　素秋
うついきに流れこゝに柳かな　臨歩
草永く花さきゝれてよき柳かり　生林

仲春

あつさ清き新よし浦乃汐干かな　越人
杉やちらも同し飲子や桃の酒　傘下
人家ならず前と陸との汐干かな　三輪 友室
山中の小花咲かぬる躑躅かな　荷亭
樹下やあつさくてきゝきゝ花の花　兼正
梅やふ花のさきけぬ杉舞かな　亀洞
永き日や瀧実路もくれぬなく　卜枝
永き日や油をあまのよあるさる　世水
行春のあとを惜しさを残しなり　同

初夏

ころもかへや白きを押るみつれ　路通
更衣襟もわりすやたくさし　傘下

こゝろもち入刀もさして見えけれは　嵐雪

首柏老人のかたなきむかし山とふ

香をてるのてふむけふ文鮮かくれる

よそ〻の舩越人かもちかへるを忘れ

かく明るわかその比文鏡みやつけらる

皆に嫌ふ〻もあるくしき衣更　荷兮

山路ゆく

なつ草てもし一ツ葉の一ツ尺　芭蕉

いちとつと打くこおろかんなき流るさ　一井

横牀果乃ゆるるてるうる茶〻に　越人

切ふあのわくのゆえふとられて櫨に　不交

花かくのかまくふなるち見えれも〻本に　旧 後藤

わけもなくその本しのわかゝ家に　亀洞

めつらしとみゆるにふとやる旅僧に　竹洞

ゆかありて〻ゆく見ず〻ゆへに　舩可

そけし〻や下ゆくみの沢卯木　冬文

上ケ土ふ〻つの稲とて麦一様　玄察

枯なるを麦をうらえる〻〻に　生林

妻かりて京の本をうりかゆり　傾紫

むさかしふ志かし里乃蓁に　鈍可

志かし蒋なまえる〻や燎の氣炙　嵐蘭

なる舩くわふなきけしの一二さに　落梧

かし鞍くゝまを寒とゝえるうえに　岐阜 李桃

大粒か〻なまこてさえし茶子の花　東巡

若さかりに習へて捨かね茶子の花　古次

添川乃序ふく

菴乃市もうへしらく寄りぬすてで　嵐雪

さひしさのりかはなれ見て出つこゝろ　野水

仲夏

宵のうちは笹にとまりて螢かな　元輔

刈草乃つまる所に光る螢かな　一髪

窓ぐらしき障子のほる螢かな　不交

闇道よりてくるき人呼螢かな　風留

居細く逃されぬ沢の螢哉　吾江

若竹の根をも下たうての螢哉　倉咕

くさむらに袖よりも出る螢かな　卜枝

手形く濡るる袖乃ほたるかな

手し先て藻草をうつる光かな

こつらくしとのりくあかめの朝蟻かな

坂乃ひれて梅の一本の螢かな

かやり出るふこ藤なせ闇くならりけり

高北く飛傘乃くつされ明坂かな

坂乃痩てく螢のくるとみかけり

藻のをこのはたる螢乃光かな

汐引て藻の光たゝむ螢かな

足伸べて蛸百合草もとる蛍かな

行乃そよ蛸焼さいくさいかな

草むらの中よりしたうの行

路步　秋芳　小春　杏雨　二水　一染　胡及　児竹　此橋　長虹　去来

閑杉まもなくてもあさ水鶏かな　世吾

みなくろ中に柳さかゆる汀かな　大津　一称

この比ハ小粽もなつ鬼ヲ月哉　尚白

毎さらに傘にまきさとる日かな
波阜かく　亀洞

粽ろうさししきとある粽縄かな　貞室

杉あしかく
粽しらうてやえ出きし粽哉　芭蕉

おかしく
粽のつしま笛ぬれて焼し　荷兮

は
粽あし八點も咲しん粽綱哉　越人

先ともの新もかまもぬ粽哉　大津　淳児

曲江に笛の名えんぬらしぬかな　柳頼

鴨の巣の見えぬさうあるハかくれける　路通

杉笠の派を見つる夜哉　卜枝

虹の根をかくれ雨中の標かな　浪可

蘭の香や涙とこなして首のなる　仝

描かきや菊結書人とうしもん　越人

咲しや竹の石夜のあさ　落梧

夏咲や粽やふきに笠康ハ田の里　旦藁

菴のあるに
すひつきへとこれに夜の山崖俵　其角

女うれや咲きいろして飄かな　芭蕉

ゆふ风の吉ならむハ人乃吉つらぬ之　卅水
夕㒵ハ蝦の鳴わしのふしさ哉　信言
山路来て夕㒵てんのあるかな　津島 市柳
花ハ座ち伝夕㒵に似そ哉　長虹

暮夏

楠も動くやうし蝉乃声　昌碧
ゆきの路逢ふけ尓たるむ声あり　卅水
夕立ふ干傘ぬる垣穂哉　傘下
涼しさふ板もやしぬ木隠哉　玄節
涼しさよ白雨あらし入日影　素来
篝しき涼しや宿乃立あり口　蕉亭
たてさき庵比松あつしぬ墨哉　門

わもかれ乃人ふ逢ゆくすゝみ　今治 如風
飛石乃石龍せ艸乃下すゝみ　付遠 俊似
涼しさや樓乃下ゆく舟乃音　仝
桃折乃とをせかし涼舟　卜枝
さとしさをすれかかる川辺哉　太宇
吹ちりく乃るつく蓮の邦　岐阜 秀正
蓮み出口ふさるやきハかつくとも　松坂 晨風
さよをさるくえるふく蓮ふ香のり　古枕
河骨ふ乃のかれあかれ哉　芙水
あさくしき松乃古哉　長虹
すきうく汐干乃汁乃清水哉　俊似
連あまき待せ結ふ吉ふ哉　文浦

引うてく馬よのすゝみかしく哉　涼月

かゝる夜も涼み出たる出水哉　尚白

夕顔をぬけたる縁に出し月　一髪

虫干しや幕をぬかえて桜花　卜枝

麻柿の葉皆こほれたるの路　岐阜 李晨

汐浸早潮に付る俗名家へし　越人

綿乃花半は蕾て葉に似たるか　素堂

初秋

ちからなや麻かるあとの秋の風　越人

桃の葉や出ゝ川ゆふ嫁の風　圓解

雲鳥雲居のたかふく

一葉散音かしかましきありし　仙化

うらひゝのちなや秋の名残しき　方生

男くさき羽織を星の手向哉　杏雨

粉白の洗ひ盥にぬきさうりける　芭蕉

蕣や垣ねのすし乃たちくさき　文鱗

あさかほ乃白さハ家も見へぬ也　荷兮

子を辛る人のもとにいひ遣 細乃白によせて

彩扇とそのみに留りしつもの　同

篠落ちあさきを行ふうつりかり　路通

あさかほやひくゝこの水に流る舟　胡及

萩かより露に掛りやゝや家の露　嵐弾

秋風や出しさ乃ちらに痩たる人　去来

涼しさはさらに雄登より酒鑪うか　昌長

畦の木にのぼりてしばしあそびけり　路通

まつむしは通る跡より鳴やみけり　一髪

きり〳〵す燈臺消て鳴にけり　素秋

あの雲は稲妻を待たより哉　芭蕉

稲づまやきのふは東けふは西　其角

ふまれても猶うつくしや萩の花　舟泉

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　芭蕉

棚作りたして淋しき葡萄かな　作者不知

艸むらしかしぬも萩に花かな　伏見 住口

こえきれて馬蝿をふる落穂かな　荷兮

刈人も懐にさす人もなし落穂　胡及

宗祇法師のことをおもふて

芒しるゝ小草も嘆く野菊かな　素堂

とし〳〵乃姥が根よろきすゝき哉　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

つく〳〵と絵をみる秋の扇かな　賀 小春

谷川や茶袋そゝく秋の雨　鳩溪 益音

石切の音も吹けり秋の暮　傘下

茨乃ねや蟷螂出る秋の暮　卜枝

麻のまゝ人乃息えた人へ亦　筆 一髪

田と畑を持くらべたる雀かな　泉

山姥の麻ひく聲や秋の月　全丈

何事かたゞうつくしき海乃間　其角

さしぬ人と猫の出て入る[illegible]　東瓊

萩の声[illegible]枝かな　林秀

[illegible]地[illegible]　越荊

ワの字[illegible]秋乃[illegible]　宗和

ワの字[illegible]　山枝

聊[illegible]秋[illegible]

[illegible]

[illegible]蓮の[illegible]　越人

一本の芦の[illegible]　防川

[illegible]秋乃蝶　舟泉

[illegible]　胡及

[illegible]　曉雞

関乃東斗にかゝりて

[illegible]　其角

[illegible]　芭蕉

いとゞしや[illegible]の衣造　加賀 一笑

暮秋

[illegible]菊の句さへ　巴丈

[illegible]　昌房

山路のきく[illegible]　越人

一夕や[illegible]

[illegible]　曉雞

かはらけのきまてみせうや菊の花　其角

菊はつゆ酒る人や頭巾帽子　同

りうまうりて菊根分ことおりゆかり　二水

かるみくりし若きくまの塚まで　伊勢　千閑

淋しさや櫨の実落るねぐ哉　濃州　芦夕

折る菊でもこゝんちれや梅りき　加生

芦の穂や○てみえかちるかまれ　路通

初冬

あちこちの木の葉しくるゝ時雨哉　湖春

さきみる人なしつらしくらん　以下

一村はくこ并するゝ初時雨　尚白

ちるれ紅葉の出見こ乃夕　満水

万句興行に

見えつくる人の中より時雨哉　荷兮

人をよけゆる日より

こ紅葉を根をうるしくれ哉　冬梧

稲乃穂乃日影のこれまされかれ　旅玉

淋しさより薫るしくれ哉　傘下

こかるしふ乃月乃婦きちるゝ　越雪

一葉ふて柿乃葉ふるよ紅葉より　一笑

このうらく淋しき囲炉裏哉　同

枇杷乃花人乃けふて落葉かれ　同

葉乃香もつゆてる木くる哉　李果

紫苑の花さく松れて猶淋し　野水

蓑虫のいつからみるや帰り花　昌碧
まちまちく寺籠にありし菴かな　仝
ゆふぐらしや雲ゆく鴨乃行く　一井
提灯をともしみそかる大橋かな　落梧
石臼乃破れてねらしやつるの花　胡及
まくらもとくさハそのえ枕かな　文鱗
ありつし紀伊の額よりる葉かれ　卜枝
吹く樒る風の傍るふき散りゆく　洞雪
蓮池のつちハえゆる枯尾花　一蛍
冬籠るる日あまつまく枯れ尾花　松芳
こがらしに吹きよせられ夢の巾　杏雨
舞る枯の浜に吹きよせる芦の柿　蕉笠

冬月

焼石を抱くや月を面かき　北元
あさ漬の大根洗ふ月夜かな　俊似

仲冬

おろし吹く境を霜ふる薮かな　浪花 揚吉
ちらし添ふてたちし落薮かな　日 室洛
捨よする葦の中うし落薮かな　林斧
紫の戸を仍ていくまでわかれかな　李雨
ほそく行ぬ畑を押ろせはおつきかな　宗之
冬の杉せんさんの実のこぼれけり　杜国
冬相乃葉の霜ふるつかへる氷かな　揚吉
漆さ池氷のしれは眠くきたり　俊似

つきかりてまくら蓑うき夕かり落水　涼風

寺行きて何をかしらぬ涼み哉　夜半

兼題涼舟

涼しさや舟まで来るとうもん焼香かな　一風禅

ぬつくりと舟まであがる涼み哉　桃笠

来そこねて舟さへまはる涼み哉　光虹

寄る風やうき舟川に出ん船の家　一井

宮舟引や涼むも恋まさりおる　亀洞

つなぎつつ行くるし舟の涼み哉　含咕

夜涼や羽白黒野嘉かしら　鼻 忠知

舟かくしまかせくる衛かな　亀洞

船鮮をさえもおとらん夜千番　村俊

井とかるるかみなく六月かな

笹原く男八人裸なり

汗出して谷に冥こむ氷室かな　冬松

海氣揚乃壽煙あるき氷むろかな　利室

炭竈乃穴ぬきく中に蕗けり　亀洞

藤蔓を涼く結てむ出る清さかな　塩車

火うちして我身にあらぬ夕哉　加賀 一笑

いつこかし庇紀せぬかはうき　亀洞

冬籠りまたよりそはん此はしら　芭蕉

歳暮

餅つきや内にもおれぬ酒のゆひ　李下

春寄くるぬ抱ゆり年のくれ　尚白

みちか花の後をしらてちり隠し　雅丞
なる近く構つくりゆる笹細工　亀洞
煤はらひ柿よさけしる瓢かれ　一髪
あるの肉こえてしるる人乃そだけ
とて杼乃実出しつかしる年
の暮をうしかりかきりなきせんとて
としのられ杼の実一つころくと　梅亭
門番をうつく　蛤一ツあひ　内習
田疵よ嵐　近よのこさ　亀洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散
いとけなきやよそにみえるもる人の顔　梅亭
青白条
としよれる菲乃花の浪に浮く哉
石清水臨時祭
沓音も走つるかさんさゝめつる哉
灌仏
さみよ乃見やつひてる洗ふ仏達
端午
枕も痩く蓬付しぬ髪櫛し
施米
うち肉とかくらん米て出臭さ

乞巧奠

竹の葉に七夕さまを見べくさき

魂迎

瓜茄も旅乃すゞしさや魂むかへ

擬虫

草の露や足乃ぬれるまゝ見ん

十月更衣

取しまれ衣之へもしの無の花

五節

舞姫に背をひ掉を折ふかり

追儺

打もれてや脱にもつるし鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計会春風春水一時来　野水

水ぬるし流れに帰る春の風

白浮藤樹浮澗水

ちる花乃よしみ背にぞ橘白し

春来無伴閑遊歩

花売に菜売るも行のもつし蝶ちれ

花下忘帰因美景

床入あるくらいの汁きかせよ花の下

留春春不留春帰人寂寞

行春もこゝろへかたし不耐るる

厳風吹袂衣不寒復不熱

綿脱て袷に縫ひなりぬるころか

池咲蓮書附

蓮乃葉も咲きたてゝる寝覚哉

暑月貪家何処有客来唯贈北窓風

涼しさはきりぬきよりの北乃まど

大底四時心總苦就中斷腸是秋天

宮の旅をするくくハ分し秋乃空

蕭々風白渡秋之氣颯然

秋乃雨をれく風ゟしみ入る人あし

遅々鐘漏初長夜耿々星河欲曙天

秋そきさりしかさねて秋乃寒き

殘影燈閑墻斜光月穿牖

稲刈や渡る鳥よさもなの月

万物秋之氣能壊色

谷菊も素しみ秋乃氣

十月江南天氣好可憐冬景似春花

こかしも去年し息つく小春哉

寂寞瀟村夜殘雁雪中聞

待ゟ出もとぬむしや宮のさ

白頭老僧仏名經

佛名乃後よ腰懐く白髪乃哉

探周乃撰ひのこし後りしか

さそうれおりしくて

かゝるよの夕日よいるさつらの哉

舟泉

付木売　あくく関を越てさ的し人乃家

釣竿縄売　かゝるさへや酒のまよ浮秋の里

糊売　あさがほ乃きえてわかむつくもを

馬糞拾　こがらしの松茂葉かきとつまえて

李夫人

魂在何許香煙引到焚處　越人

かけらへ乃拖つくもわつころも穴

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覚花冠不整下堂来

ものとふを学ゆるゝくる寐臭乃郁

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

ロア　二十七

乃人不見ゝ應笑

ものの数寄やむかしの春乃經あらん

西施

宮中拾乃嫁眉只許不献君王是愛君

花笑の挂ゝへらし　牡丹の郁

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

よれあふもまうされぬみやこ乃都郁

一日あゝとまうての行くく

寐やの坂や法郷低焼むまゝ出ゝ行

杜若のせん須書乃まきるは名れ

濃秋乃眠つゝれつゝ扇への郁

酒古

卯

辰

巳

午
未
申
山獣
飛禽
里虫
海魚
川魚

水乃ひかり蛍に上を踏れけり
拵乃きゝ武家乃夕舎ゐてなり
五月雨や鶏しまるうのかげり
　雨よあれて生とふ川乃気味ほ

麻留乃上をとつれあられさよ　樹水
鴫突乃ほ新長き日おし式　児竹
枝毎に虫ころりよ蜀漆の杯　含咕
杉のしろ翻りなり盆乃有　仝
秋乃野翳りしくの犬好り式　含咕
　牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾
　是謂人
一方を栖さく桃乃接木かな　越人

　蔵舟於壑蔵山於澤謂之固矣而
　夜半有力者負之而走
かくさるゝ師走乃市るうちにされ
　絶聖棄知大盗乃止
七夕を摘みすてゝもなきむかし
　鋭者夭
散るとくはなさりのは花ちらぬ　桂夕
　純者寿
翁乃のなるよかゝるを秋の雨　市山
　蕪房
はつときれ暮れゆく時を走りけり　一井
師走

うつくしく人にみらるゝ荊かな　花虹

一休
ゆかしくのかたちかはしや月乃雲　湍水

法然
鳴ぬ乃[illegible]にかよふ[illegible]　乱孫

山岩
折く山に霧に減るゝ岩乃角　湍水

海岩
苔むしてほかに土もなかりけり　全

名所
八重さくら奥とみえたる龍田川　杜國
しら魚乃背や武蔵の大江山　若亨

からさき乃松は花より朧にて　芭蕉
菜一把さゝて[illegible]波の[illegible]　湍水
[illegible]にみえて[illegible]　若亨

琵琶橋眺望
鳥鳴る男嶽よ[illegible]　舎咕
園[illegible]　[illegible]
[illegible]法國寺[illegible]乃[illegible]　[illegible]
[illegible]　杜國
昔我[illegible]布子[illegible]　亡文
麦の穂や内卯[illegible]志賀のさと　芭蕉
五月雨にかくれぬものや瀬田の橋
湖乃水まさりけり五月雨　去来

牛もしる相撲のわさりの五月哉　一髪

角田川みく

いさのほれ嵯峨乃鮎食ゐに都鳥　貞室

みやしのをいふ秋に見乃をる　破笠

いさよひもまださらしな乃郡哉　芭蕉

夕月や杖よみたふる角田川　越人

九月十三夜

唐土に冨士あらはけふ乃月もみよ　素堂

鳴ら突乃てるやまもろへゐ稲田哉　胡及

鴫ら突も萱津乃わたの心よま哉　渕支

武蔵野や行くかいくる時雨　去泉

御子を居根のふちかんすいれ　尚白

かし澤やしまりあらせく汐時哉　伊勢 洗友

むさし野にしねて秋の見あしふ　洗悪

死つくしと生海鼠を焼やかの奥　俊似

乗されの稲轆轤やとのたく　津島 一笑

宮乃冨士芒や紅葉に川にかゝれり　湍水

たし秋山も嗔大宮乃夕への郡　洲水

星を待乃やうとみちうくや鳴るなる　芭蕉

秋る乃見や石鼓の中秋の蝶蝶　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠哉　芭蕉

大和国平尾村にて

花乃陰謡に似たる旅ねかな　仝

嵯峨里を眠りつゝ通るさくら　夕楓

日の入や雨よりくらき桃の花　一蝶

のどかさや湊の昼の生さかな　荷兮

去る脱ぐうしろすがたや衣ぬぎ　芭蕉

ある人の餞別に

わりなしや涙おさへて笑ひけり　除風

寐ぬる夜は舎焼布団やさしき　乞松

数とられられ夜明る旅寐かな　昌碧

みちの思や桂国を出る市の家　松芳

夕まぐれの大名の一夜かな　傘下

芭蕉老を送る

稲妻のしかもつきぬる別かな　路通

なきさくて猿まつ比は秋の塒　一井

あき風まなこにさえられし　野水

袖いろし光さえ秋のかゐなさま　舟泉

男をよそにするを松にかへぬこと　嵐蘭

さしかゝりお人くみむらて

文月の舟に二人は舞ひけり　荷兮

越人旅立しけるにつかはす

月よりも眼精つよき旅のうく　野水

おくられつおくりつはては木曽の秋　芭蕉

蜘の巣は見えもちりの秋の暮　路通

杉形よりよ捕甚角のてゐむけ

にかくれて

稗稲に乗て居て秋の山　荷兮

とゆりし稲子をひろひ帰りけり　京　ちね

入月に今しばし行ことをまつ　去来

能きけりも秋ハ世ならぬ声きけ　一井

品川へ人をおくりて

澤庵乃墓をとはれの秋の暮　文鱗

艸枕おもふ人ハ秋乃あつ　芭蕉

旅立る故郷乃人にわかれて

見送りの後しをりて村しぐれ　濃州　常秀

鳴海にて芭蕉子に逢て

いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮

葉に見えし胴織も綿乃入まで　野水

其角にわかるゝ時

おしあけて出るやさかつきの名　荷兮

早秋いでてさむく宮乃萱　越人

うら庇乃戸にはさまれてゆく　傘下

里人のさかりにかゝる乃宿　宗因

越人と吉田乃驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅寝してみしやうき世の煤拂　同

述懐

草菴に桜を折て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也　路通

子を稲守りて田を手放に乗　杜宣

余所乃田乃惜入ぬも浮世かな　落梧

ある所にて

莕花にたつさき馳より奥の院　杜国

櫻さくらあそびくる乞食哉　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉の声　芭蕉

あやめさん彩きくへてものつらき哉　落梧

きさらぎ入湯ぞすゝいりり一盞　臼

一本の草すゞしさもあはれなる経ぬ哉　杏雨

肩衣に緑さそひ出す世の名残　杉風

似合しや白髪にかつく麻衣　重尚

九月十日素堂亭にて

かれ果や〜先葉の中に残る菊　嵐雪

のうらめと貪るきくの好穂哉　暁雅

人の呼名とふ事を

あれこそはあれこそあれ此あれの名　芭蕉

旧里の人にいはれん

こかしれ此落葉にかへる山中哉　杜国

鎌倉建長寺にまうでゝ

落葉かく身を清くぬれたる山家　越人

ある人のりしろやしくて落葉を

一茶杉にて秋く

ありし秋あかる落葉に焼て見るさまり　荷兮

古池のうはみ出る暁哉

学もちら紙の暖房や冷ん鐘の声　嵐準

楢乃実に穀をまぜされ絶ねば　去来

風や遠り耳やちかりとしの暮　西武

ぬるさむや膝乃綿に泣年乃暮　芭蕉

さはしのるすしをわかるまの暮　除風

老をまるんして堅貴生に歩しりか

行年や穀にまくらをかしけり　越人

哀

妻の世にある人乃喜見ば　伊勢 一有妻

きぬしや金針てよりも賤しき　除風

坊居出て寐るかまくさる別かな　岱江

乱し干乃風に立枝すさ川かな　文潮

虫干に小袖ふるてさる女の那　秀文

さしけめし姉ら姫ら只花まより　心棘

らへ多粉黛無影なし

有園乃稲妻消るや月の影　長虹

一先る色人待つみめ飛ぞろかな　岱白

さひしさなれる

つま死して家もえも焦れし女夫の死　荷兮

去りぬりし落ちに時まつき夕かな　小春

妻乃名のおくそくりし結ぶ神送り　越人

松の中附の旅乃ともやくかな　俊似

抱きし火燵を慣ていなふむ　舟泉

うらさむき火燵消える別れかな　嵐甚

山畑よりのはたりや芹川　松芳

きぬくしを二数へてや底かわかり　冬松

わかれしやきぬくの氏神さき　昌岩

無常

末期に

落る花を東西さす河瑠璃とかな　義

早くも迅速

咲く川数のみのあさきすしの鼻　傘下

末期に

東西や空さしき咽のほとさん　堺　元頓

松坂の浮瓢より十への手より

こるよりひやかる

橋のうちより詠る名をとりや　荷兮

ゆめくしの追ぶさかり

ふるのうゑまかなしく消る宿かな　京　去来

あるべきうしなかれの衙やまさん

おもふ花の小瓜しらえゆるちらきれ　為々

世をさへて妻の身まゐりのは

もぬきの桐のこぼしあなし　野水

辞世

あさ夢し松篭一つなる亡骸

つかをとつれの花

似さ錦の出ぬく出さん一羅り

一原みふく　落梧

あさくさや小町のみのかへるさよ　鴉君

妻乃追善とて

どこ見しきての里人それぞれの秋　自悦

妻なくて妻乃こまりしをいたましく

ねられずの世やかたくひかしけむしやら　玄来

子の病身なりし後

その人に鮒さしみしも秋のくれ　其角

母に別れける子の哀れを

別るゝ子や新より含む秋の暮　尚白

ある人乃追善とて

埋火もきゆや涙の烹る音　芭蕉

旅にて身まかりける人の

あはれさのとしのくれにて消えにけり　嵐蘭

ゑる田神くりこゑやゑの仏のみゑ月　かゞえ　小春

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

眉のくる毎おもしろき涅槃像　嵐蘭

西行上人五百歳忌に

ありきつゝおもひ出るさくらかな　荷兮

おもかし遠忌に

連翹やそこらも日ぐし蓮飛なり　胡及

うく首に嫁の巣うく余二王哉　杉芳

木履ぬぐ僧もありけり雨の花　杜国

はつはなをたゝく花乃寺　冬松

花に雨降らは使ん撞きかね　其角

貞享つちのえ辰の季春廿一日
東照宮の別當僧正乃御房に参りて
上野近く住給ふの法華八講の侍る
としきこの序に結縁おほえて
序品のこゝろを

散るゝ花の間ハむかしはなしかな　越人

女房の聴聞ゆるされたる提婆
品に精く聴きされは龍女成仏の
心をつくして念のみあつくれ鼻かむ声の
しけれは

ほろりと落る涙や花の露　日

麓なる尾上の櫻咲にけり　俊似

古寺や法のさかりの菫草　一井

八講にて

浄土の家聖よふてこそ孫生れ　伊勢 千閣

咲よりも散るを人見る紅牡丹　一井

夏雲や水涼しの江湖水哉　蕪葉

尚白にて

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉　芭蕉

灌仏のこゝろ清しき声かな　尚白

三井寺にて

腰のあふき礼拝そろの清山かな　一壱

示れに菴一日の清水かな　加賀 一笑

十妙足

をりかゝる流れて通るしるしには　荷八ら

即身即佛

衣洗の妻と佛となれる佛には　愚益

得くるひや縁の絶るる衣ぬ　嵐琢

おもふくや門かてあくる施餓鬼棚　荷兮

おもけの衣をわむしのありさまよ　撰丸

石竈に施餓鬼の棚のくるまには　文里

蝦蟇にも掛棚をとる向なり　亀洞

なかはつる道てあくる無縁には　卜枝

施餓鬼のくしらえさてん松の陰　鈍宮

平等施一切

施餓鬼にもあそふ人とも絶えなり　俊似

稲妻は大佛ならぬ鐘弁には　藤与

烟草に引導渡くよ絵には　卜枝

ある人の唱の景色ありして水路よ統不食不図ふも威して

ありて房くとうつゝ　藤与

房くそぬん佛ありあくかあを

あるものの寅ある　吉甫

藤も清寺の鼓かゝりうて

あるくてく坊きれうしや肉のふ　一井

許乃かふ本縁をうへる法師は

人のかよあるてくらみかけれ　卜枝

かくふまゝさえくれかれて

衣着て又ぬれしゆかり一時雨　瓦璋

鎌倉乃安国寺ちかく

なつかしさの涙や直すあらん　越人

古寺乃もと

曙や伽藍し乃もみぢ　義子

月

雲霧やかゝる二王乃腕　俊似

つくりゑくこかされたるしまれ　一井

紅森する人のきぬや拂さき　文涸

千鰍ふるもかせりし道のくれ　其角

業平品七句

如遊者嫁兵

まつ白なむめの咲けりこゝろへ水　胡及

如裸者得衣

君乃身や風榾捨てあまの家

如商人得主

双六のゆめてよむこゝろつよき水

如子得母

竹まるゝわけともつくさけ水

如渡得船

首乃は濤乃棹来さまのかり

如病得醫

かくしまき清めるゆきや山出水

如暗得燈

秋乃淋や打ふゆるゝときに記さうて

神祇

古る世や高志るゝうる梛子哉　語石

二月かゝる雪ゆきに

それさゝきや打の月の梅　荷兮

あんしと梅ちらうる庵かな　卜

嘗るあらそふてこそ神乃梅　亀洞

上下乃さゝしぬやれ神の梅　昌碧

雅のかゝてゝあらりめ梅乃中　語石

何やられかれを之くし梅の紀　越人

光りあるおそさる神の梅　舟泉

身代も志ゝるおりもし梅乃香　雨桐

門あらて梅乃瑞籬れうみかり　重五

徐る見ゝる人の後乃さかりかな　玄梁

若き華く歯朶かゝさ見ゆる社かな　蚓可

言ふ乃後川後つをみるさかりかな　李桃

流れの後乃末せふ乃中の梅うれ　好葉

仔りくきれ排ふの中を通つかり　舟泉

言ふる乃灯をかゝる火串かな　亀洞

破扇つなさるうれ後桜うれ　未学

川あ遁瘧まさるれれ桜うれ　荷兮

こかしし里乃子祝く神輿哉　尚白

此月乃高は後ここちぬやれかな　松芳

みさゝれや禰宜乃さけゝる油筒　落梧

若ゑびす奉納

きしきしぬるもめて神々祭 利生

江乃方と西條ゑびす萩の神祭り 耕水

江ノ康川萩唄乃旅業神祭り 昌碧

かつきれ神ふきあさき尾犬祭り 村像

梅桃やはな様ぬる媒そくし 卜枝

祝

肩付をいくよふるのあしき宗て 文

蓬ぞる年乃春よ

蛍まも作を編む気ゆるふ 文富

君乃代やこのくしれさ玉つてき 栽人

妻若を行かるともれ汁乃石 傘卜

いきうゝゝ海亀乃よふ杖つらん 寿朋

千代乃秋にあらしまきつゝしゝ宗 日

きそうしかそれ祝る人やきて

光祝へ梅をん乃そ我 芒叢

曠野集員外

誰か花をおもはざらん誰か市中にありて朝のけしきを見む我東四明の麓にかくれて花乃ちるを見るにこれをんしたかひて信州田毎のよしの山あきらかに見しとおもへるを実おほくす又要領し居るとおもへわれど此る尾陽の野水子の帳に芭蕉翁の侍しとききしをまちかねしにさいつ比田野人君をとうて実に此るを感ぜしむしかうしてこの人の中に虎乃初元世にとゞまるへき進ざれたる人ありて猿衣を着しくらうし鉢乃ありかこそくらしたのさし猿といかく見えける三声乃あはれをしるも實乃宗老杜のこゝろあるや粗屑の句をあらはして

素堂

素をうとされ集によみれぬ居るし

この文人のるすつりてとりけれしと三人用に出会に咏して

ゑをとさしかさん空乃けろふ　　埜水

楼の路も去ろうま去乃其く　　荷兮

も乃去つらなるれつゝし余さり　　越人

門の石原苔園乃やまとゝなり　　水

風乃目利を初秋乃雲
武士の衣あらし山まで逆らし
志とりまつくそ谿乃呼る声
岩より湧き出る茸乃多く
清かし漂はれて居る也雨
立ち止まる松明走る花乃端
千句いつともなれ山乃てらら
晩まあるし一字様も咲残り
あてこうもゆきさ夕月衣たね
寂乃牙八流の宇る節なる
秋深きと多く盗人乃妻
悔るや　西も東も繕の響

兮人而兮人而兮人而兮人水

さゝ舟なりける利根の川面
垂乃目のてかくしとしてかゝる景乃
舟まよ所し　潮織うちるて
ふらしときのふの市の煙ぞさ
孤つきしや人乃ゑらし葬
柏木乃脈気の味乃つくりと
さしやくしのこふ先えつる
肉乃影とり合まわり辻土撲
秋よ身するより里乃浅桶
斎しられ歩移よ出るなるけき
られなし志のよ不破乃葉他
妙しこゆる諌よ涙こほれ出し

兮人水兮人而兮人而兮人而

火箸のさき(?)てつめあつきとし　守

きくたとりのつやもしくのさうらを(?)　人

あやさしくれて池乃かへしを(?)　水

花さうの雲静かはきさ定らん(?)　守

粉くさよなかなか焼き楽(?)　水

長らえれさ名月ってれわされて(?)　人

大根きさつくく干にいとをし(?)　守

遠浅や浪に出見えん湖しき(?)　斎

けりなれなまうん湯乃ふくる里(?)　花守

のとりしやかさ湯に花を解き(?)　昌碧

百足乃攫る葉しさきり楽(?)　冊水

夕暮乃雲の白さをとらち涼(?)　千泉(?)

秋きさ乃草を摘むうりさせ(?)　鶴宮(?)

萩の都のとよおこしぬ悉さや(?)　年

一話色しても古綿(?)　亀洞(?)

並乃るまそうさしる宜禄に秋(?)　花守

京よ枝懸し杉毎に年営(?)　昌碧

いつくもふくて出るよ蔵造(?)　鶴雪(?)

湯をまつさのさたせさらし(?)　千泉(?)

涼しやし莚りてくる川乃端(?)　冊水

ころかされしやそ小舟(?)　荷兮(?)

秋風に女車乃髭杉こ(?)　亀洞(?)

神さ石話りきさ根源の法輪(?)　鶴雪(?)

時しらぬあめのさへぎらぬ花の末　昌碧
八重山吹ハさらさらなくし　野水
日のいでやたれハ六何もちん暁かな　舟泉
むやまとけよ土そしめふ刈　亀洞
向まそし実やるわしのかなしみて　荷兮
揃韻らく人乃見ものれ当　昌碧
配不足ゝて寸魚乃加減覚えつゝ　釣雪
家うしふきるあらのかそく　舟泉
むく新よ抱いむつかしく赤膾を　野水
門をとるもり茶なまむこむ　荷兮
やさらさて是将軍乃叢係し　亀洞
花りむ達さりされも高田派　釣雪

盃もつまそるそうりの下戸の月　昌碧
やまを秋乃世をあらをなふ　野水
つそくろつるも打わける謝る寮の窓　舟泉
毛さ月をゆまさ安房の小湊　亀洞
夜の日やえるうきむ浪の照貝て　荷兮
桶乃かつらを入しまむくり　昌碧
人あまる服さましてなまりむ　釣雪
ついうろらん落るる精進　野水
見しき餅うきくり吾乃水　舟泉
柳のうしろ乃かまきりの卵　李芳
夕雲乃際拍よくきて入るらん　冬文

きりぎりすやゝよつえゆる月影　荷兮
秋草のともしらぬさ孤咲にけれ　松芳
弓ひきならぶ勝ね撲よくく　亀泉
夕ふもみの松かぜそちらかる　荷兮
夕月し砂の中の木のえし　冬文
大嵐の波の音をうきゝく　亀泉
旅ねせしとうち笑ひて　松芳
こゑより端をこして荒まかる　冬文
酒の肴も猪ならぬ夕川　荷兮
婁年けふ礼もせぬ只狎しき　松芳
とりかく双葉の緑を生ほまさる　亀泉
はふるもうちも咲きさる花の色　荷兮

月の影や龍音井の岩　冬文
折ふしをうれしつまれ風　亀泉
野狐らしけく猫息のこく　松芳
庚辰も入寺ま事の志ハうるし　冬文
十日のまくの打ちよろこし　荷兮
山里の秋ぞつくしと生鰯　松芳
竹越かつくらつるやさむ　亀泉
さふくしとあうぼを流る月の影　荷兮
馬のしとをれもうるのつめく　冬文
まりしさうを雲井乃ちゝの雨と　亀泉
姥婦まゝく蕎麦あふつらゆ　松芳
つらくと錦きる身のうしまさ　冬文

曉ふかく提灯よむ　蕪竹
けしの花とりちらしてある　松芳
味噌をとるとの遠きハうし　東泉
荒野乃門さゝれける葡萄　蕪竹
浮世しよあるよふる　雲文
春の秋見るまてあらく鬼　東泉
新酒よりけるたむ旅しら　松芳
きさうき瀑布を雲に松をとえて　永文
そうし面白き山口乃家　荷竹
おしきに結ぬるの折もあり　荷竹
雨乃こつきよしてる戸乃こ　丹水

引すてし車ハ琵琶乃かとざえて　旧
あしきまれくも人のしかしかふ　蕪竹
有の秋旅の声さゝいつる乙　旧
一夜ふすふふし露のきうけ　丹水
初あらしまつせれ寮乃坊をた　竹
菜畑ふむまてそろろけくり　水
土肥をぞ久しよきさよ糸く　仝
下判和とん神を取う哉　水
通路のついてろこけて逆田り　仝
六條るおりし恋乃うハまさ　竹
代すかぎさしし清れ出て　仝
滅一岦るよ鮮一節　水

月乃剣常陸りうよいろく森
花咲かりしも仏よよおか本
天仙蓼は玲倉あたしまの書
うきうゐけよ宵經乃中
たく人ともつてさぬうらるを
夕せいしき酒つらそやる
弱乃やと賑自ら經清り六罕要
秋乃あわしる昔淨瑠璃
染そらくもよくわろらほじき見端
八日乃月乃よいさとつるまく
山乃端よ松よ松よのかとそ害
きつきるもくらふそろくしともる

全 丂 全 水 全 丂 水 丂 水 丂 水 丂

日暮きう白も猿うけ斗乃影もれ
太鼓たゝきよ浴子の本るら
ころしと捧さる手貸四まお杣
鼻さくくろもらきと蘇年よわる
急あよゐも忘れぬ敷て一二年
夜をつかく住居りそろ名書
三方のねむうと光ならる
供奉乃草鞋を旅まさゝを
眠くや小塩大原深源の花
人おりよ折りける乃川岸
月さしの夜る飛火壺乃鼻とかくある

全 丙 丂 水 全 丂 全 丙 全 丂

打舟のくちきに撫をさしてへよき園で
栄温法師乃ゐをすれし出き友の
祇乃森とのおとこそ経か字れてきぬ
肉よ柄をさしこへよき囲哉
坂乃行るとうり夜の衣の森　越人
よつくりを涙に盃くちくる人　傘下
打毎ひとりをみきこの世ぬきの空　同
まあ打つかへ行さくてよりかなき　人
使乃者よ返しずにうち倒さちれ　同
あれこれて猫乃子を選るさまくよ　芋
としさくるまろく治やうしたり　下
よろてすこの前をさく拙とふ　同

まを打のまけよ泥をうしれ良　人
大勢乃人よ法華をとこぶさねく　同
肉のりよ弱瓶滝う川　下
喰ふ糠もみてふ柳も浩浪し　同
秋のくしきれ畑みる哉　人
りのまくれいつそ世を背くへき　同
寐ふちし書のみ字のゆうむ戸　下
花乃盛をこしへかさる涙落つ　同
それもの勘乃こときき春風　人
うち躍く浦の甘れ乃ほけき　同
肉へよりて打よ伏ゆる犬　下
砕きをんのおの歌さき比ぶれや　同

ゑしきつくかゝる雨乃降出しけ　人
歌合稽古蓑着まいらせて　は
まかき献立乃こゝろちがひあり　下
灯甚乃油こぼして押かくし　は
白きをはらせんまうしきと庭　人
かく風の花のこゝろ葉のふりくと　は
半ハこえたん流也乃秋　下
おつくしと肩うる銀の鼓に似て　は
人の情にハさみくもれし　人
はきりしく瓜也茸を荷ひ込　下
千世の春乃てうて小町中　人
折そうしと小法乃者の言附る　下

塔同きよかし念佛　人
首並もうらむ不来花寒　下
田楽きれく榾雕しき　人

深川の夜

雁がねもしづかにきけばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪乃大きさ五石ばかりや　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安ハ是名利の地　仝

医乃おもはくさへ拝見かれ　越人
いそかしと師走の空に立出て、　芭蕉
ひとり世話やく寺乃跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨乃あけぼの　越人
きぬ〳〵やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ声のうつくし　越人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき二番錦しけり　越人
有とある花はなの根を求めて　芭蕉
雲雀さへつるころの肌ぬくさ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝

足もとをさむしき霜のひきさかる　蕉
家ふかくて服紗につゝむ十寸鏡　人
そのをりはかゝる神子の袖いふ　蕉
人去ていやさ法坐の白むなる　人
動揺に飛ける堂乃片隅　蕉
ありさまは気のおもくうれしさよ　人
垣穂のさゝけ露はこほれそく　蕉
あやにくに姉は妹に夕なあめ　人
何の雲をたゝあとをつむそ　蕉
初月のうへの霜を消されし　人
砧も遠く鉢よりいそかり　蕉
秋乃田をかゝらせぬ公事のおもひきさに　人

さびしなかる文字間にくるゝ　蕉
いかめしく瓦庇の木葉や　人
跡追さる子乃襁褓をかるなき　蕉
なかのは諸は義家もしらずし　人
田かしをくつて脾きくち　蕉

翁に伴なはれて来る人のめづらしき

萱ゑるに蔦はひの文や天津雁　其角
三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に畳を引づりて　仝
飲くりともなく茶をたてゝなる　角
雉か鳴く裾にうけゝる夜の衣　仝

歯ぎしりはさへ恨かつよの衣　人
泪とる涙かゝるゝまりて　仝
静御前に舞をすゝめける　角
空蝉の離魂の煩乃おそろし　仝
あしたなかりける金二万両　人
いとほしき子を他人もらひ付をとり　仝
やけとなるとてうしつよくなる　角
酒熟き耳につきてるさへ哀と　仝
魚の骨をしつぬ月の江の舟　人
そ鋭いろの富士八湊に秋の葉　仝
なしとさしおる草乃一瓶　角
饅頭をこれはき神につてされる　仝

うき世をつけく恐ぬ人ハ捩　人
西王母東方朔も月ハ八兄れ　仝
よしや鸚鵡の舌乃うしろき　角
あちきなや戸よくさすや主の妻　仝
悪の数よも争ふ越さのまん　人
やれ小麻のし浮きを流ち葉て　仝
茶つくる者を師走し乃り　角
夕精霜乃むさきよ後のまつ　仝
いくつの皇を荷ふ強力　人
究いちよ塵うちそしむ艸枕　仝
ひいあらきりて修学の八朔　角
満月よ不断さかうを流ひてや　仝

念者法師ハ秋のあはうせ　人
女まくれ中とうし出てき武の子非なし　仝
弓よそくひくる客あけの中と　角
夜そとよ乞食の結ふ守頃出して　仝
とのきしてもうぬ馬士の亀とう　人
花の香るあきつき脇こしうや　仝
むしろ敷へき喚續乃妻　仝
ふとらし　新居ハ人の碑をとさき　嵐宅
秋うそらをしいつも湯婦　越人
月の有明書を引ちしみ中ねて　仝
於面業の草るけよ坊　宕

とらへかね牧にまよひぬ里の子る　仝
川越られぬ堤下のこち　人
痴癈良の通ひをさるかしら鶏の白き　仝
唱哥ハむつかし声やはらかなる　兮
ふくさみるさひしれしのさきさ雲よ　円
後ろむくよくよりたそかれき　越
と鉄よりも酒あくすむ声ささ　人
何撰ふまく出へる浪人　嵐
菊桶を据ゑて一ツ脱　兮
時宜髪をそる宵の月影　越
声しかの群て活ある女客　人
つゑさの医者乃後姿や　兮

ちる花は日ころくれよき比出　越
よふこゑしは何そのふらん　人
初雪やことしのびゆる桐の木に　野水
日のみしかきを乃鉄範　落梧
山川や鵜の喰物をさかすらん　仝
錦を遠かりつかへるへりかるを　野水
折からさま押合寿は草臥ぬ　円
おつとらしも櫨の萩　落梧
川越乃歩ふさされけり秋の雨　水
ねつと痛かる哉のきことあまさ　梧
ワくるせことやりまくさくら櫻の下　水

よと切てきおろしにはけ乃うきころも
冬ある夜乃鴨をむつりと水飲て
こゝそくり郷をお仕舞偲
峯乃雲あちこちあちらを見せ(?)ら
旅よとおれらのんび寄藤さ
京ゝさ語るこみよわれさまとも一支よ
下戸ハ皆いく月のわれろき
耳や鳴やようてい花の散なを
名残繰んさせるゝ乃初午
いつやらも常るすぬ柴折くれ
山依何て人来りはなかり
ちうくしとうさぶみけてる米車

枯 水 枯 水 枯 水 枯 水 同 水 枯

挑灯たてく組閣きまゝ純
何事を添ゐん髪を掘出からし
出ちく梅をいそぬつれなくさ
まつりしやかる馬よりきのせく
りは府中は舩海てまわ
雨やらく雲のちきりて面白や
柳ちるうせ例の英ゐ
新あたく肉てさかれ五十局
寂しよ秋を女夫孫まくり
己を上あよ見さるうせうし
秦りくもやれいかしへの酒
紅ての千良偽るこゝ切坂よ

水 枯 水 枯 水 枯 水 枯 同 水 枯 仝 枯

涼しさや砂を先へ入てくしまる　回
まち白のうらから涼しさをなし　水
松の木のくもを雲に根ぐさや　柏

・

一里乃炭竈より多き鐘　一井
かきねの先の猿来る　嵐輝
さきくさや西来を引ふ涼しめん　胡及
有明さうれ猫によふ人　長虹
夕月の入さは早き渡さハ　嵐輝
なかうに鰤をつまうらむ秋　一井
里深く源氏よ二三日　長虹
室町の妻よをかれて憂　胡及

間ハれてハ涼しよ地の立ちゆくき　一井
菖蒲よくきらく切布しく文　嵐輝
うらしさに霜紀なりに湯を立を　胡及
立ちゆく出家の戦乃吉郷　長虹
なうふらうよるをあはそハうち菖　嵐輝
蛤よりハさふ女中不利　一井
浦風る脛吹まくる肩涼し　長虹
みるもかしこき紀伊の作魂座　胡及
ありき者のさし矢射くれる花の後　一井
蒜くしふ香りし遠ざかりけり　嵐輝
はかのうれおるさくを聴しくん　胡及
秋の夜乃綿乃縁よ蔵つて　長虹

もとめしはさゝる田もさらして五淡　嵐蝉
こたへ多かしある好風を絡なり　一井
末なきさこにあかるうなりし松の枝　去虹
拜まうしる人くし乃奥　胡及
此年まなりて参の役ゝなくさ　嵐蝉
汝くうも世をとるつい森入肉　一井
香るゝて薩摩乃陰のうへてさき　胡及
こきとる好あうまま志辰藍萩のそ　去虹
陀のゝ桟入きのなま乃くゝなりる　嵐蝉
名引うふる人乃足音　一井
毒なりと風一きれも喰あし　去虹
序風ゝ盈ちゝく名ゝ飛白雨　胡及

板屋さゝく踏ゑふき庭乃肉　一井
ちらし日乃ぬけゝる泉やさ磨吃　嵐蝉
なくしと日足乃志れぬ花墨　去虹
見ゆるゝを印まさゝなつやし　胡及

拔されたる人乃道をしらく千今此浪は
ひけて崑崙山乃西にふりてあかれたる
ありかれは いさ西はなく黒山北海の地
有らむ留守もありて本は秋風洲のくるく
つとむれかあれとて しあまりとらえて
と源津乃さらいみゆてきたるさえ利けりし志
このおもてに浦こそそのことよかくせきりふら
無んとくまんあといつそのかくふるにたる
世に於乃宝をあらし海とる堂せむつめぬ
萬人もかたく尊拝侍りきまして神拝

ゐとゐれよくな刹くゐめいきこなれとも
うゐれ彼うしれ翁くれうしれいしつめな
世にいくゐこういなよしなせ板よりそ
おのつゝから志きもよしくなうゐへしこの
ころ此部りてふその出板なる七ゝ乃ふミ
を一まとめとなしてゐ世をしくその奥
級を志るしめんと書ゐ何ゐものなゐ
大鵬館主人かいふ
安かはく水き三ッのとし
長月九日

跋

俳諧書籍目録　　諧仙堂蔵板

俳諧七部集　冬の日　春の日　ひさこ　猿みの　炭俵　続猿　あら野　半紙本七冊

同 続七部集　深川集　卯辰集　有磯海　小文庫　千鳥掛　貞享式ゑこと　続の原　小本二冊

其角七部集　虚栗　新山家　花摘　萩の露　錦繍緞　誰か家　続虚栗　小本二冊

蕪村七部集　其雪影　明烏　一夜四歌仙　桃李　続明烏　五車反古　花鳥篇　小本二冊

芭蕉翁発句集　小本二冊

奥の細道　翁真蹟　泥彩　去来本　一冊

葛の松原　続五論　同　支考選　一冊　一冊

笈の小文　枯尾花　翁反古　翁追善　一冊　二冊

弘化二年
新桂峰求之
井上坂堂

俳諧てにをは抄　北邊大人口授　有國識　古歌集の句々の手爾葉を詳毅しまて家の義をくはしく说そ　全部六冊

歌聖發句集　橘千蔭選　五冊

新歌發句集　日選　五冊

新百員　之家十二　定考　一冊

華實年浪草　十五冊

字引
合類大節用集　文字出所和漢乃證書を委しく加る　十三冊

伊陽翁芭蕉翁家系生涯者
芭蕉翁古郷傳　有國撰　翁初冠の比より晩年に至るまでの行状を委しく記し伊陽に終る所の附合文通句論四季の発句を撰み論書をあつむ　二冊

安永三年甲午十一月發刻
文化五年戊辰十一月再刻

皇都書鋪
野田治兵衞
浦井德右衞門
筒井庄兵衞